南房総市岡町遺跡

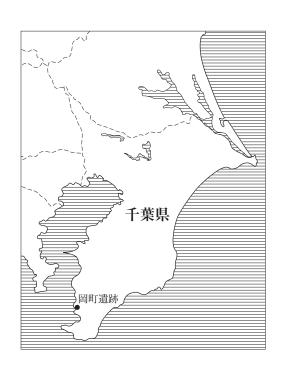
一広域営農団地農道整備事業(安房2期地区)埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成30年3月

千葉県教育委員会

南房総市岡町遺跡

一 広域営農団地農道整備事業 (安房2期地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書 一





SI005 出土遺物



SI005 出土土馬

序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の 痕跡などが埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。 これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解 明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第27集として、広域営農団地農道整備事業(安房2期地区)に伴って実施した南房総市岡町遺跡の発掘調査報告書です。調査では、縄文時代から平安時代に至る遺構・遺物が検出されましたが、中でも平安時代の竪穴住居跡から安房地域では初の発見となる土馬や多量の土師器が出土したのをはじめ、海岸平野における集落跡の一端を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする 関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心か ら感謝申し上げます。

平成30年3月

千葉県教育委員会 文化財課長 萩原恭一

凡例

- 1 本書は、千葉県農林水産部安房農業事務所による広域営農団地農道整備事業(安房 2 期地区)に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。岡町遺跡 南房総市富浦町南無谷175-2ほか (遺跡コード243-003)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る整理作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章に掲載したとおりである。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節の縄文土器を安井健一、他は伊藤智樹が行い、編集は伊藤が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県農林水産部耕地課、千葉県安房農業事務所、南房総市 教育委員会、(公財) 千葉県教育振興財団、今泉 潔、岡山亮子、小高春雄、野尻夏姫、栗田則久、越 川敏夫、郷堀英司、酒匂喜洋、笹生 衛、橋本勝雄ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記の通りである。
 - 第1図 南房総市発行 1/2,500
 - 第2回 国土地理院発行 1/25,000 地形図「那古」平成16年
- 9 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社が平成28年に撮影した2016_C54_22482を使用した。
- 10 土層、遺物類の色調等の表記に当たっては、小山忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』(財) 日本色 彩研究所を参考にした。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン・記号等の用例は、下記のとおりである。また、赤彩された土器は 赤色で、須恵器は断面を黒色で表現し、それ以外は挿図に明示した。

遺構内焼土及び被熱範囲

土器黒色処理

本文目次

第1章	はじめに	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••••••••••••••••••••••••••••••••••••	1
第1頁	节 調査の概要			1
]	調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			1
2	2 遺跡の位置と歴史的環境			1
3	3 調査の方法と調査概要		!	5
第2章	検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			7
第1頁			,	7
]				7
2	2 グリッド出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			7
第2負	弥生時代		1	[]
]			1	
第3負			1	
]	竪穴住居跡		1	6
2				
ć			2)(
4				3.
Ę				
6			3	
第3章	まとめ			
写真図版				
報告書抄	少録·······		·····卷ラ	末
THE EX			٥	•
	插図	目次		
	JT [2	ППУ		
第1図	岡町遺跡の位置と周辺の地形 2	第10図	弥生時代グリッド出土土器 12	
第2図	岡町遺跡と周辺の遺跡 4	第11図	SI001A·B13	
第3図	グリッド配置図 5	第12図	SI001A出土遺物14	
第4図	基本土層図 5	第13図	S I 0 0 2 · 0 0 3 ······ 15	
第5図	岡町遺跡全体図6	第14図	SI002·003出土遺物16	
第6図	SK001 7	第15図	SIOO4と出土遺物 ·············17	
第7図	縄文時代グリッド出土土器 (1) ····· 8	第16図	SI005と出土遺物 (1)19	
第8図	縄文時代グリッド出土土器(2)9	第17図	SI005世出土总核 (1) 13 SI005遺物出土状況20	
第9図	縄文時代グリッド出土石器 11	第17区	SI005遺物出土状况	
까기의	型人門[1/ ファー田上/日館 11	241017	51003四上思70(4) 41	

第19図 SI005出土遺物 (3) 22 第29図 SD004と出土遺物 35 第20図 SI005出土遺物 (4) 23 第30図 古墳時代~平安時代グリッド出土土器 (1) 36 第21図 SI006・007と出土遺物 25 第31図 古墳時代~平安時代グリッド出土土器 (2) 37 第22図 SZ001と出土遺物 27 第32図 古墳時代~平安時代グリッド出土石製品第23図 SZ003と出土遺物 28 土製品 38 第24図 SZ002・004と出土遺物 30 第33図 スラグ土壌サンプル採取位置 39 第25図 土坑・ピット分布図 31 第34図 製鉄関連遺物 40 第26図 土坑・ピット 32 第27図 SD001・002・003 33 33 33 33 33 33 34 34 34 34 34 34 34	6 7 品・ 8
第28図 S D001·002·003断面図と出土遺跡 34	
表目次	
第1表 製鉄関連遺物観察表······ 41 第3表 スラグ土壌サンプル分類表····· 42	2
第2表 製鉄関連遺物分類集計表42 第4表 土器観察表44	1
図版目次	
巻頭図版 SI005出土遺物	
SI005出土土馬	
図版1 遺跡周辺航空写真	
図版 2 遺跡遠景·調査終了後全景 図版 7 SD001·003·004	
図版 3 SI001A・B・SK001 3B03グリッド遺物出土状況	
SI002カマド内遺物出土状況 2A23グリッドスラグ等出土状況 vp.はtrantal R R	
SI003遺物出土状況 遺構調査風景	
SI002·003·004	
SI005遺物出土状況 図版 9 縄文時代土器(2) 図版 4 SI005·SI005遺物出土状況 図版10 縄文時代石器・弥生時代~古墳時代土器	
SI006・007・SI007カマド 図版11 古墳時代~平安時代遺構出土土器(1)	
SZ001遺物出土状況 図版12 古墳時代~平安時代遺構出土土器 (2)	
図版 5 SZ002·SZ004 図版13 古墳時代~平安時代遺構出土土器 (3)	
SZ003遺物出土状況	
SK002・003・004 図版15 古墳時代~平安時代遺構・グリッド出土土器(1)
土坑・ピット 図版16 古墳時代~平安時代遺構・グリッド出土土器(2)
図版 6 SH001·002·003·004·005·006·007 図版17 古墳時代~平安時代土製品·石製品	
CITOOO 000 010 011 019 019	
SH008·009·010·011·012·013	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過(第1図)

千葉県南部は、温暖な気候に恵まれた条件を生かした果樹や酪農、花卉栽培など、県内有数の農業地帯である。千葉県農林水産部耕地課・安房農業事務所は、これらの農産物や畜産物を安定的かつ安全に輸送し、併せて地域農業の活性化を図ることを目的として、広域営農団地農道整備事業を計画した。この工事の実施に当たり、千葉県館山土地改良事務所長から平成8年4月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえ、平成8年5月に工事予定路線内に岡町遺跡が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査及び整理は千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。各年度の組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

○平成28年度 発掘調査

文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 田井知二 担当者 主任上席文化財主事 伊藤智樹 期 間 平成28年7月25日~平成28年11月7日 内 容 確認調査 上層 1,075㎡/1,075㎡ 本 調 査 上層 890㎡

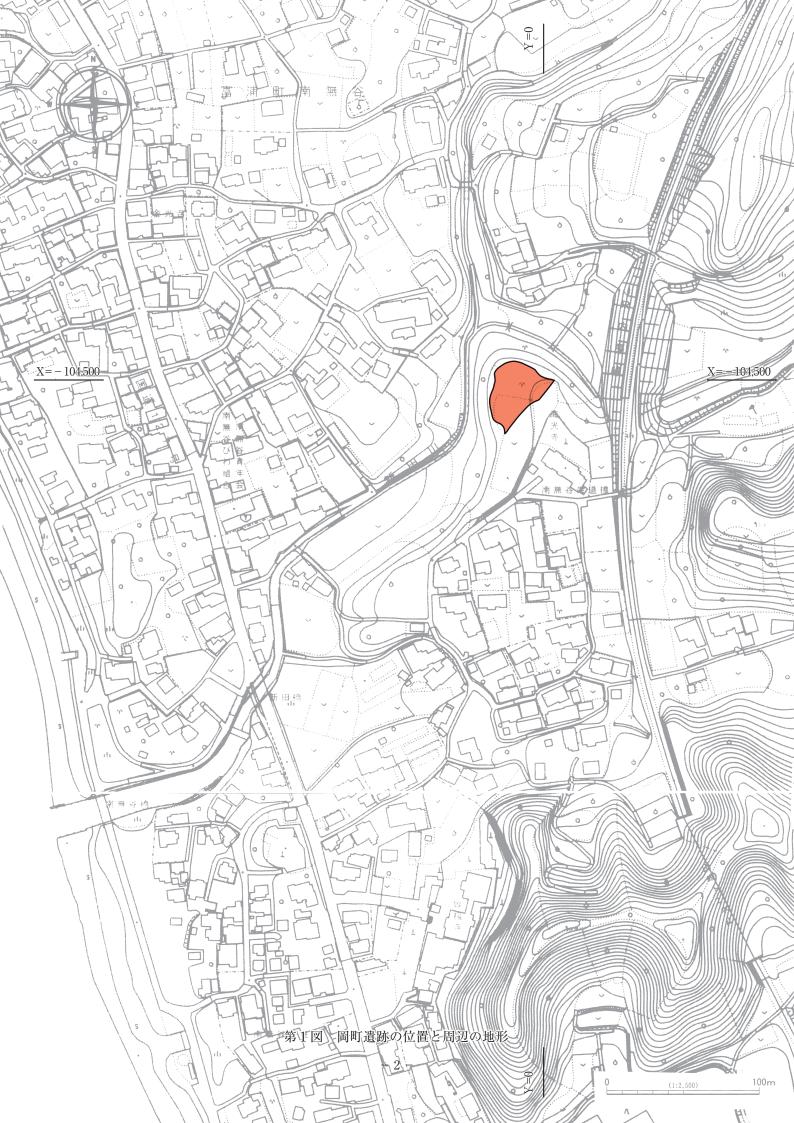
○平成29年度 整理作業

文化財課長 萩原恭一 発掘調査班長 山田貴久 担当者 主任上席文化財主事 伊藤智樹 内 容 記録整理から報告書刊行

2 遺跡の位置と歴史的環境 (第2図)

岡町遺跡の所在する南房総市は、房総半島南部に位置する。房総半島南部は北側を安房郡鋸南町鋸山から鴨川市に至る清澄山系の山塊によって画され、古くから安房地域と呼称されてきた。南房総市は、富山町・富浦町・白浜町・千倉町・丸山町・和田町と三芳村の6町1村が平成18年、いわゆる平成の大合併により誕生した新しい市域であり、北側は標高350mの富山、337mの伊予ヶ岳、標高408mの県内最高峰愛宕山を擁する嶺岡山系が横たわり、西側は東京湾、東側と南側は太平洋に面している。

遺跡は、東京湾を西に望む標高11m~16mの丘陵上に位置し、南無谷海岸と呼ばれる海岸からは直線距離で約400mの距離にある。遺跡の乗る丘陵地は、背後に迫る標高40m~80mの山塊の裾部に当たり、その縁辺は段丘状の地形となっている。調査地点はこの段丘面上に立地しており、眼下を東から西側に蛇行して、旧富山町との境、木の根峠付近に源を発する新田川が流れ、東京湾に注いでいる。また新田川を挟んで東側の丘陵端をJR内房線がほぼ南北に走っている。南無谷地区は、海岸と背後の山塊の間に開けた集落で、海岸部を走る国道127号線に沿って商家や民家、寺社等が軒を連ねている。なお、南無谷の地名は、



日蓮宗の宗祖日蓮が当地に留まり、法華経の教えを広めたため、村の名が「南無妙法谷村」となり、その名が転じて「南無谷」となったという説話が伝えられている。南無谷地区から南は、山塊が海岸部に迫る地帯を経て、岡本川下流域に形成された平野部が館山市域へと続いている。

富浦地区の遺跡の多くは岡本川下流域の海岸平野、大房岬付近の海岸部に点在している。旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺跡は数少なく、古墳時代後期以降に増加している。旧石器時代では、大房岬遺跡は剥片が採集されている程度である。縄文時代では深名遺跡、大半津遺跡、仲尾川貝塚がある。深名遺跡では昭和60年に町道建設に伴い発掘調査が行われた(深名瀬畠遺跡)。この調査では、中期の勝坂式期~加管利 E 式期の竪穴住居跡 41 軒、石囲い炉、埋甕炉、石鏃 315 点、石斧62 点などをはじめ、大珠や石棒・石皿など多種多様な石器群が出土している。土器群の特徴は、東京湾を挟んで西側の神奈川県域の様相に類似することが指摘された。大半津遺跡では長さ90cmの大型石棒が発見されている。仲尾川南遺跡では早期(子母口式~茅山式)・前期(関山式)の土器片が採集されている。

弥生時代では向原遺跡で橋の付け替え工事の際、壺型土器 2 点が発見されている程度で調査歴は少ない。古墳時代から平安時代では集落跡の実態に乏しいが、包蔵地が本遺跡周辺及び岡本川流域の平野部に点在する。本遺跡周辺では同じ段丘面上に駒込遺跡、上ノ坪遺跡、御園遺跡があり、岡本川流域では青木遺跡、吉田遺跡、上前田遺跡等が平野部に存在している。その一方、丘陵部では小河川沿いの谷津に面した山稜の裾に横穴墓が盛んに造営されるようになる。特に豊岡付近では汐入川流域に大谷横穴群 10 基を含めて 10 群約 40 基の横穴墓が密集して存在する。開口部や壁面の崩落により詳細不明の横穴墓が多いが、大谷横穴群では撥形の平面形状でアーチ形の天井部を持つ横穴墓が確認されている。

奈良時代以降は安房国となる。富浦地域の海岸部は安房国平群郡達良郷に当たる地域と見られている。 安房国は、718 (養老2)年5月に上総国から平群・安房・朝夷・長狭の4郡を割いて分立した。その後、 741 (天平13)年12月に上総国に合併されるが、757 (天平寶字元)年5月に再び上総国から分立されると いう経緯を辿った。

中世から近世にかけては、戦国時代以降里見氏の活躍する舞台となる。本遺跡から南約1kmの距離には 里見義頼・義康の二代の本拠であった岡本城跡がある。丘陵と尾根、海岸部を巧みに取り込んだ城域は海 城としての性格を有しており、館山市稲村城跡とともに国史跡となっている。岡本川左岸の平野から東京 湾に向かって突き出た大房岬先端には近世末に大房崎台場が設置され、海防の一端を担った。台場の管理・ 警備は天保13年の忍藩から始まり、その後会津藩、岡山藩と引き継がれ、安政5年に廃止となった。

参考文献

富浦町教育委員会『千葉県富浦町深名瀬畠遺跡調査報告書』富浦町教育委員会 昭和62年 富浦町教育委員会『富浦町史』昭和63年

富浦町教育委員会『千葉県安房郡富浦町埋蔵文化財分布地図』平成元年

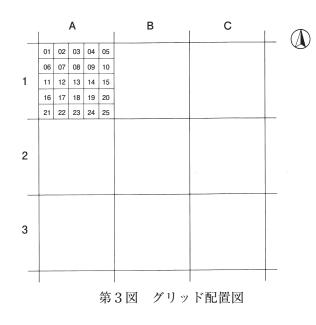
千葉県教育委員会『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』平成8年

- (財) 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)』平成12年
- (財) 千葉県文化財センター『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』 平成15年
- (財) 千葉県教育振興財団 『研究紀要 25』 平成 18年

生稲謹爾・NPO法人富浦エコミューゼ研究会『富浦の昔ばなし第2集』平成18年

(公財) 千葉県教育振興財団 『研究紀要 28』 平成 25 年





3 調査の方法と調査概要 (第3・4・5図)

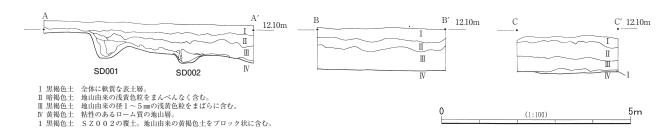
調査前の状況は、対象地の約半分南側が工事関係の車両兼資材置き場として利用され、約半分の北側が雑木林であった。調査対象面積は1,075㎡である。調査開始時は北側約半分に当たる雑木林の伐採が終了していなかったため、南側約半分の区域の表土除去から開始した。北東側では表土下約0.2 mで砂礫層が現れ、この面で溝SD001・003が検出された。一方南西側は溝付近を境に一段低い段丘面が形成され、第 I 層表土層の下に第 II 層暗褐色土層、第 II 層黒褐色土層が堆積し、この黒褐色土層中に土師器や須恵器、鉄滓等が包含されていることが判明した。第 II 層中の遺物の出土状況は、いくつかの集中部をもっていたことから、この層

位での遺構検出を目指しながら人力により平面的に掘り下げを行ったが、遺構の把握はなかなか困難であり、最終的には第Ⅳ層黄褐色土上面で竪穴住居跡、土坑、溝跡等を確認した。なお、溝SD001・003から東側は、新田川に面した斜面となり、遺構が確認されなかったため、この区域を除く890㎡を本調査対象面積とした。

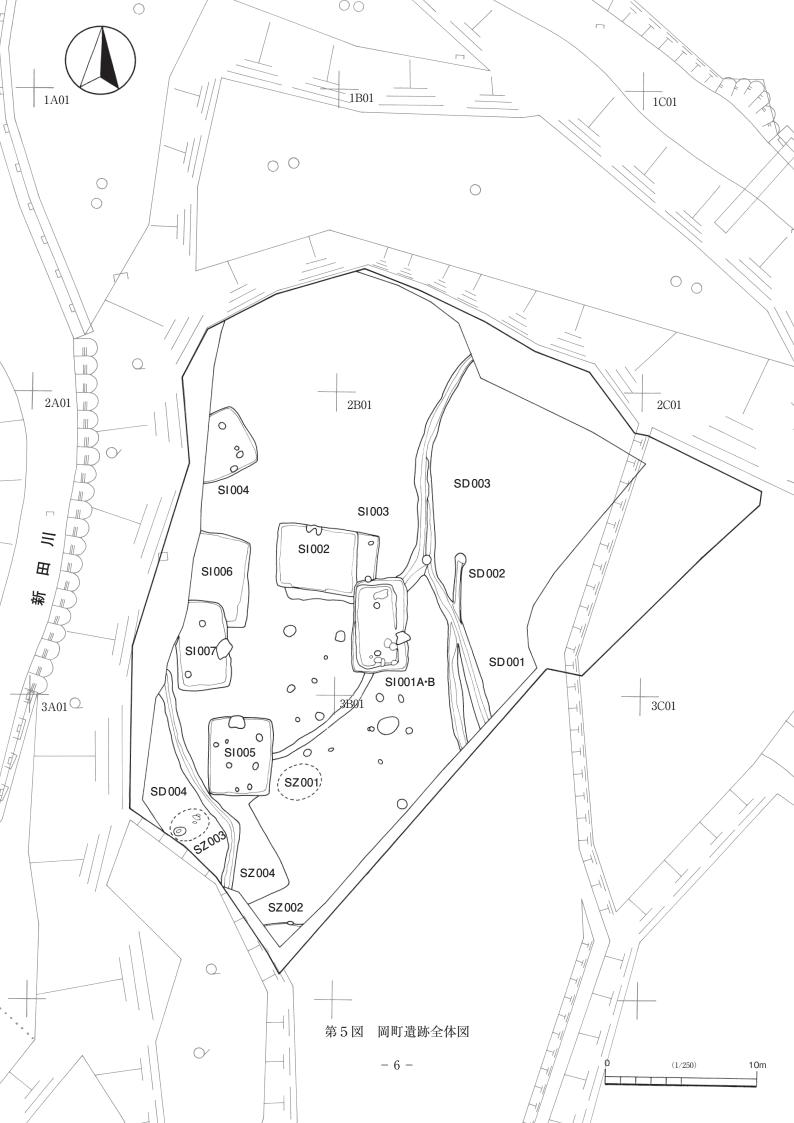
発掘調査に当たっては、調査対象範囲の全域をカバーするように $20m \times 20$ mを基本とする大グリッドを西から東へA・B・Cの3列、北から南へ1・2・3の3段に区分し、さらに大グリッドを $4m \times 4m$ の小グリッドで 25 分割し、北西隅から東へ01、02・・05、南へ01、06・・21 とした。小グリッドは、北西隅の小グリッドから 1 A01・1 A02・・と呼称した。

遺構の調査に際しては、竪穴住居跡 = S I、土坑 = S K、溝 = S D、性格不明の遺構及び遺構を伴う土器集中箇所 = S Z、ピット = P の記号を付して遺構番号とした。なお、報告にあたって、ピットはS H の記号に変更している。

調査の結果、古墳時代及び平安時代の竪穴住居跡8軒、性格不明の竪穴状遺構2棟、土坑4基、ピット13基及び土器集中箇所3か所を検出した。中でも平安時代のSI005では、多量の土師器とともに土馬が出土し、安房地域における初の発見となった。また、その他縄文時代晩期末の土器群や平安時代の製鉄関連のスラグ類など、特筆されるべき遺物も出土している。



第4図 基本土層図



第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 土坑

SK001 (第6図、図版3·8)

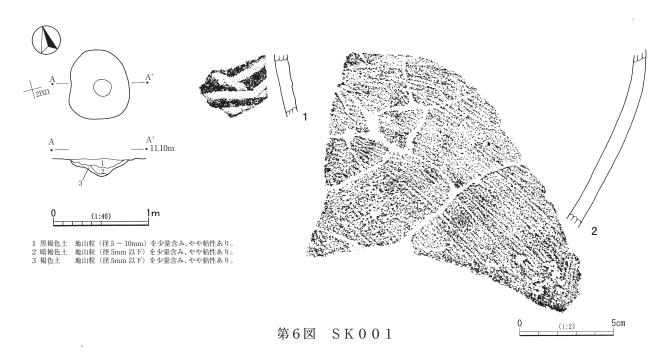
本土坑はSI001Aの西側、2B16・21グリッドにまたがって位置する土坑である。平面形はほぼ楕円形で、長軸を北に向ける。土坑の規模は長軸0.74 m、短軸0.60 m、深さ約20cmである。遺構確認面は地山の黄褐色土上面である。覆土は黒褐色土を主体として自然堆積の状況を示していた。底面はすり鉢状である。遺物は、覆土中から1、遺構確認時に2が出土している。土坑の時期は縄文時代晩期の所産と考えられるが、性格は不明である。

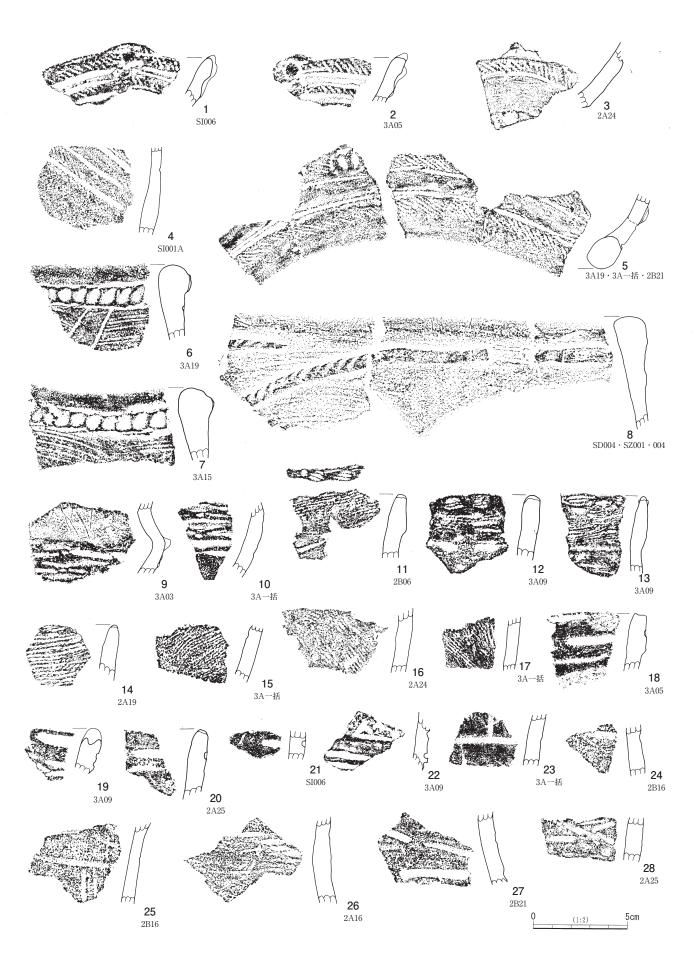
1は浅い沈線文が施されるもので、深鉢もしくは甕形土器の胴部である。2本の沈線が横位及び斜位に配され、三角連繋を構成すると思われるが、小破片のため詳細は不明である。2は条痕文が施されるもので、深鉢もしくは甕形土器の胴部下半である。

2 グリッド出土遺物 (第7~9図、図版8~10)

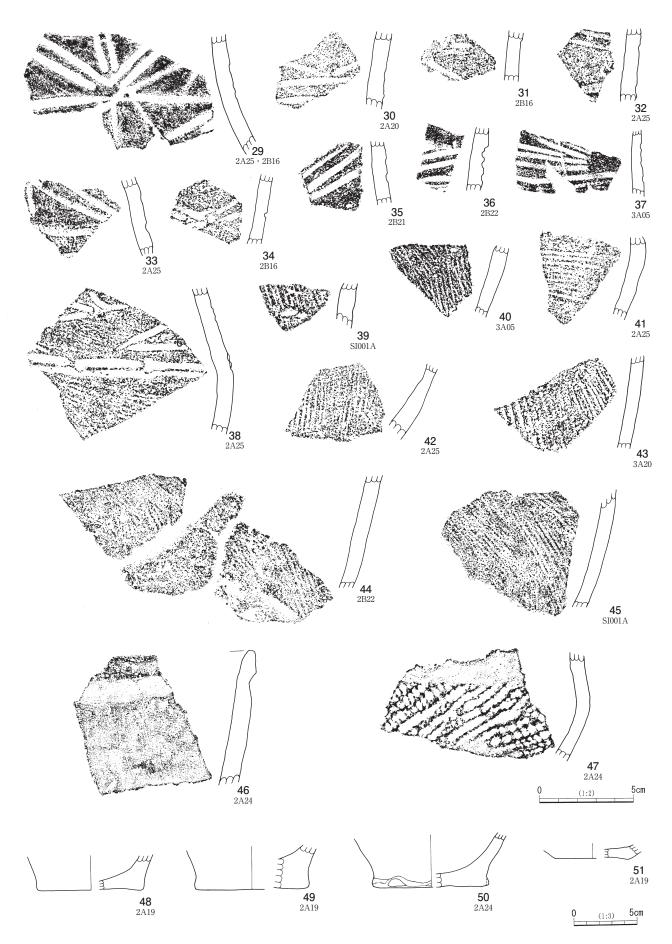
グリッド出土遺物として、土器と石器をまとめて掲載する。なお、土器は縄文時代として記載したが、一 部弥生時代の土器も含まれていることを断っておく。

 $1 \sim 8$ は後期後葉から晩期前葉の資料である。 $1 \sim 3$ は同一個体の浅鉢である。器面は磨耗しているほか、特に 2 は熱を受けている。3 の右端は帯縄文がやや上側に突出しており、口縁部小突起の直下と考えられる。以上は安行 1 式に比定される。4 は角形土器と考えられるものである。全体に板状であるが、右端の内面は強く湾曲しており屈曲する辺の部分と考えられる。右下は突起が剥落した痕跡があり、角底の隅と考えられる。時期決定は難しいが、斜位に配される沈線の施文具は尖頭状でしっかりしており、磨耗しているものの沈線間に縄文が施されているのが認められることから、安行 3 b 式の可能性が高いと考える。5





第7図 縄文時代グリッド出土土器 (1)

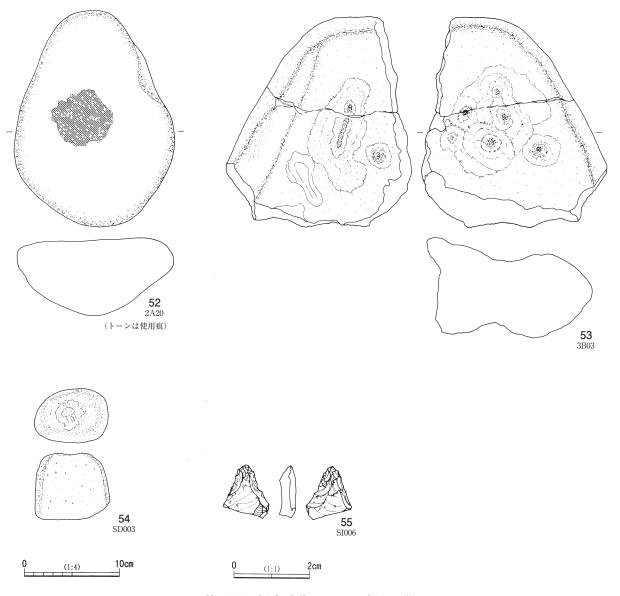


第8図 縄文時代グリッド出土土器 (2)

は台付土器の台部である。帯縄文の肥厚はしっかりし、平行する沈線も尖頭状工具が使用されしっかり施文されており、安行 3 a 式に比定される。 $6\sim8$ は該期の粗製深鉢である。8 は磨耗が著しく、肉眼では条線がほとんど見えない。

9~47 は晩期後葉に位置づけられるものである。9・10 は浅鉢もしくは鉢で、胴部下半に浮線文が配 される。 $11 \sim 17$ は粗製深鉢である。 $11 \sim 14$ は口縁部で、口縁に沿って横位の撚糸文が施され口唇上には 原体が圧痕される。 $11 \sim 13$ は折り返し口縁で、14 もおそらく折り返し口縁であろう。 $15 \sim 17$ は胴部で、 節の細かい撚糸文が施される。以上は千網式に比定される。18 ~ 22 は深い沈線文が施されるものである。 18~20は深鉢もしくは甕形土器の口縁部で、18は折り返し口縁となっており、19には小突起が付けられ る。いずれも口縁に沿って横位の沈線が配され、口唇上にも沈線が施される。23~38は浅い沈線文が施 されるものである。いずれも器面が磨耗しており文様がはっきりしないが、横位の沈線によって段を構成 し、三角連繋もしくは菱形連繋が配されるものと思われる。34 は菱形を構成する沈線の中心に刺突を配し ている。35 ~ 37 は比較的遺存度が良好で、3 本以上で組になった沈線が横位あるいは斜位に配される。特 に 36 は沈線そのものも角棒状工具を使用しており、他の資料に比べ線が深く輪郭も明瞭である。直上は やや肥厚しており口縁直下かもしれない。38 は上半部に沈線文、下半部に条痕文が施されるものである。 SK001 出土の1と胎土が類似する。両者の境に2本一組の横位沈線が配され、上側の沈線には等間隔で刺 突が配される。39~45は条痕文が施されるもので、いずれも深鉢もしくは甕形土器の胴部である。ただ し器面の磨耗が顕著でわかりにくく、40 は撚糸文かもしれない。44 は SK001 出土の 2 と同一個体と思わ れる。以上は荒海式に比定される。そのうち $18 \sim 22$ と $35 \sim 37$ は沈線が深く明瞭であること、胴部破片 についてはモチーフが集合化した沈線により描かれており、いわゆる雑書文的な様相を残している。その 他の資料は沈線が浅く不明瞭になり、単線化していることなどからより新しい様相を呈していると思われ る。前者は荒海2式、後者は荒海3式にそれぞれ比定されると考える。46 は無文の深鉢で、口縁直下に幅 広のナゾリ状沈線が配される。東海地方の五貫森式の影響を受けた土器と考えられる。47は鉢形土器で、 底部から器壁がやや強く外傾し、途中で屈曲して内傾気味に立ち上がる。屈曲部を境として下側に節の大 きい LR 単節縄文が施され、 上側は無文となっている。 荒海 4 式以降のものと考えられる。 48 ~ 51 は底部 で、48~50は深鉢もしくは甕形土器、51は浅鉢もしくは鉢である。50は底面側縁に粘土紐を貼り付け裾 部を広げており、荒海式の所産と判断される。

52 から 55 は石器である。52 は砂岩を利用した磨石で、平坦面の中央に磨り痕が認められる。全体に火熱を受け赤化している。最大長 17cm、最大幅 12.6cm、厚さ 6.1cm、重さ 1.66kgである。53 は砂岩製の凹石で平坦面の両面に複数の窪みをもつ。最大長 16.5cm、最大幅 14.5cm、厚さ 8.5cm、重さ 1.93kgである。54 は安山岩の敲石である。頂部の中央に敲き痕が認められる。最大長 5.2cm、最大幅 5.7cm、厚さ 4.3cm、重さ 161gである。55 は黒曜石の石鏃端部である。最大長 14.6mm、最大幅 12.1mm、厚さ 4.1mm、重さ 0.65g である。

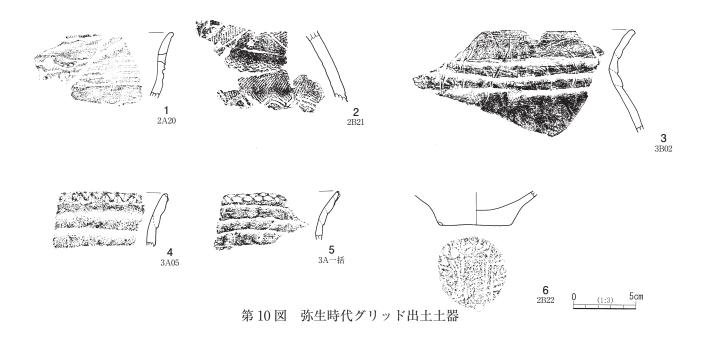


第9図 縄文時代グリッド出土石器

第2節 弥生時代

1 グリッド出土遺物 (第10図、図版10)

1は壺型土器の口縁部から胴部である。小さく外反する口唇部から胴部がわずかに膨らむ器形である。口唇部直下と胴部上位に浅い沈線で直線、三角形の文様を描き、三角文の中には鋭い刺突文が加えられる。端部に補修孔が穿たれている。裏面は丁寧なミガキが施される。胎土に細かい砂粒を含み焼成は良好である。中期中葉の須和田式に比定される。2は壺型土器の胴部である。上位は細い沈線と縄文で山形文を描き、下位にS字状結節文、2条の鋸歯文の間に羽状縄文を施している。内面はナデ調整される。胎土に粗い砂粒を含み、焼成は悪く、表面に小さな気泡状の穴が無数に認められる。3~5は口頸部に輪積み痕を有する甕形土器である。3は平縁で表面には条痕のような粗い調整痕が顕著に残っている。4・5は棒状工具による刻みが施されている。いずれも胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良い。6は壺型土器の底部である。木葉痕のほか粒状の圧痕が認められる。以上、2~6は後期後半の所産である。



第3節 古墳時代~平安時代

1 竪穴住居跡

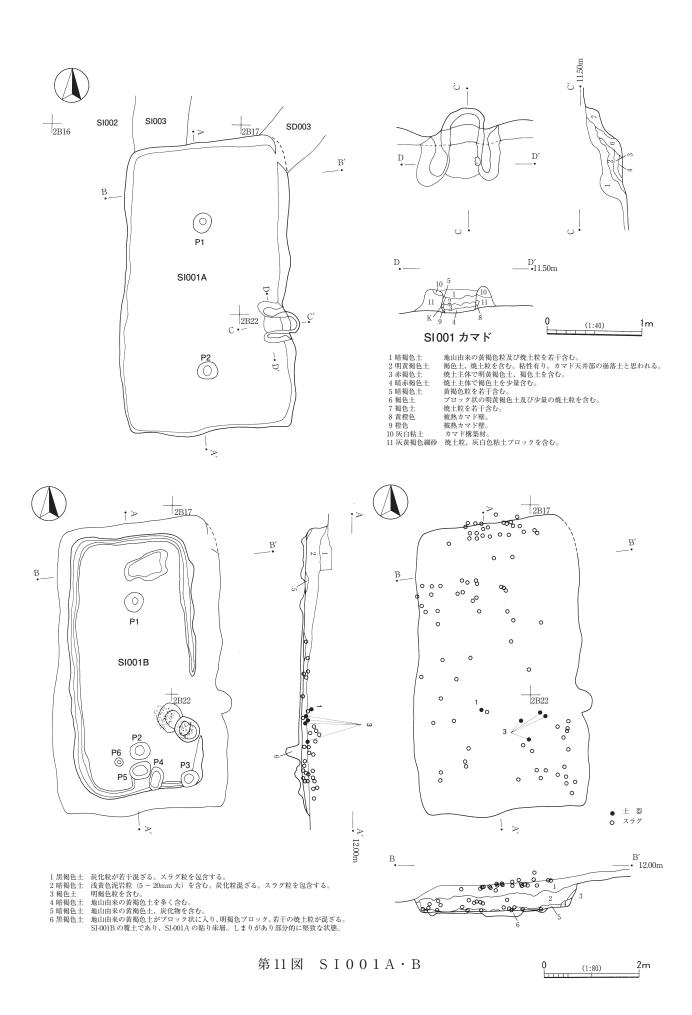
S I O O 1 A · B (第11·12 図、図版3·11·16)

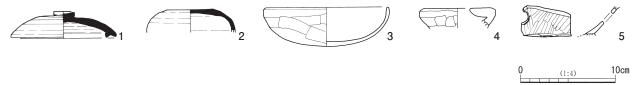
調査区の中央からやや東側、 $2B16 \cdot 17$ グリッドに位置する竪穴住居である。床面精査の段階で内側下層に一回り小型の建物跡が確認され、その上層を貼床層が覆っていたことから、建て替え住居と判断し、外側を新しい住居跡 001A、内側を古い住居跡 001B とした。また、北西隅で $SI002 \cdot 003$ 、北東隅と南西側で溝 SD003 と重複する。土層断面の検討から、竪穴住居跡相互の新旧関係は(新) $SI001A \rightarrow SI001B \rightarrow SI002 \rightarrow SI003$ (古) となり、溝 SD003 は本跡より古い時期に掘り込まれていることを確認した。

001A は主軸がほぼ南北方向に向く長方形で、長軸 6.17 m、短軸 3.72 mである。カマドを東壁やや南寄りに設けている。壁の状況は遺構検出面の地山が東側 SD001・002 の付近を境にして傾斜する部分に当たることから、住居跡の北・東壁側の残りが良く、高さ 48cm~ 40cm、反対に西・南壁側で残りが悪く、高さ9 cm~2 cmという結果となった。床面はやや起伏があり、001B が重なる範囲は貼床面となっている。主柱穴は長軸線上に2基があり、001B と共有している。径が 43cm~ 41cm、深さ 36cm~ 34cmである。カマドは袖部、燃焼部、煙道部が残っていた。袖部は灰白色粘土を主体に構築され、煙道部が壁外に 20cm程張り出している。燃焼部は方形で浅く窪む。

001B は 001A を一回り小さくした長方形で、東側の一部を除いて壁溝が検出された。壁溝外側での規模は長軸 5.55 m、短軸 2.71 m、溝は幅 $30\text{cm} \sim 20\text{cm}$ 、深さ $10\text{cm} \sim 3\text{ cm}$ である。東側の壁溝が途切れた部分に、カマドの燃焼部と思われる円形の掘方を伴う焼面が 2 か所存在する。001A と共用する主柱穴のほか、円形の浅いピットが 4 基、不整形の土坑が 1 基検出されている。

遺物はスラグと土師器・須恵器が出土しているが土器類の量は少ない。スラグは遺構検出面上層から床面付近まで分布していて、北側の密度が高い。一部は住居外から出土しており、住居廃絶後、時を経て投棄されたと考えられる。スラグについては、第6項で後述する。





第12図 SIOO1A出土遺物

1、2は須恵器蓋坏である。1は凹形のつまみと返りを有する。天井部を回転へラ削り調整、返りはわずかに突出する。2はつまみ、返りを持たない蓋坏である。天井部は平らでヘラ削り調整である。坏身の可能性も考えられる。3は土師器の坏で、カマド前面付近から分散して出土した。外面は全体を手持ちヘラ削り調整、底部が丸く収まる。4は土師器装飾器台の器受け部で円形の透かし孔があく。外面は赤彩されている。5は土師器器台である。炉器台と称している形態で器受け部が鋭く屈曲している。1の須恵器蓋坏は袖ケ浦市雷塚遺跡10号墳で出土している湖西窯産とされる例と器形や法量が近い形態である。時期的には7世紀後半の年代観を与えられていることから、本住居跡も同じ時期の所産と考えたい。なお、4・5の器台類は混入品である。

S I 0 0 2 (第13·14 図 図版3·11)

2A15・2B11 グリッドに位置する。東側で SI003、南東隅で SI001A と重複している。新旧関係は SI001A より古く、SI003 より新しい。平面形は東西辺が北に振れる変形の長方形で、規模は長軸 5.05 m、短軸 4.26 mである。カマドは北壁中央部に設けられている。床面はほぼ平坦で、カマドから西側と東側に壁溝が周る。また、カマドの周囲は砂質土の硬化面が認められる。壁高は最も残りが良い北壁側で 46cm~ 37cmである。ここも地山面が南に傾斜する場所にあたることから、南壁側は壁溝の一部が検出されただけである。カマドは袖部、燃焼部、煙道が残っていた。袖部は灰白色粘土が主要な部材であるが、右袖は基部の壁面を袖状に削り出した構造で、先端部に直方体の礫片を心材として使用していた。煙道部は壁面から 50cmほど張り出している。なお、柱穴は検出できなかった。

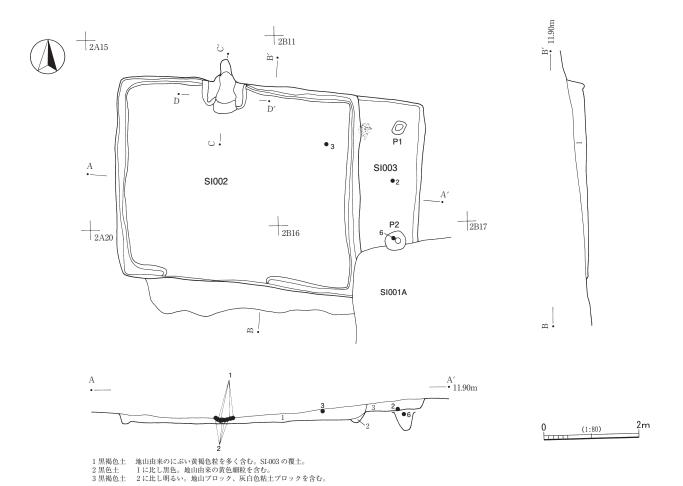
遺物は土師器の破片が大部分で、カマド内に集中して出土した以外は、量的に少なく、散在した状況であった。1は小型の土師器甕で口縁部と胴部の境に弱い稜を持つ。胴部下位はやや粗いヘラ削り調整が残る。また、胎土に径3mm~2mmの石粒が多く混入する。2は甕の胴部から底部となる。全体の形状が不明だが胴部の張りが小さく、長胴タイプになるかもしれない。3は高坏の脚上部で赤彩が施されている。

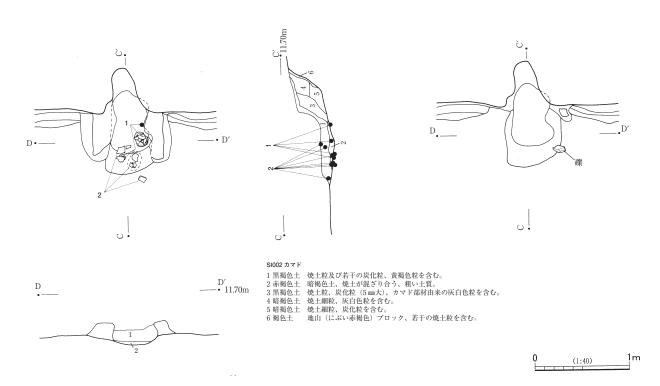
本住居跡の時期は1の小型甕の形態から、7世紀前半に位置づけられる。

S I 0 0 3 (第13·14 図 図版3·11)

 $2B11 \cdot 16$ グリッドに位置し、南側を SI001、西側を SI002 に切られている。検出された範囲は北壁側から東壁側の一部と SI002 の南側に接する床面の一部である。この床面残存部を加えた住居跡の規模は一辺 $5.5\,\mathrm{m}\sim 5\,\mathrm{m}$ 程度と推定される。遺構確認面から床面までの深さは北壁側から東壁側で $39\,\mathrm{cm}\sim 17\,\mathrm{cm}$ である。東壁に沿った北側と南側でピットが 2 基検出された。北側のピット 1 は径 $27\,\mathrm{cm}$ 、深さ $11\,\mathrm{cm}$ 、南側のピット 2 は径 $45\,\mathrm{cm}$ 、深さ $39\,\mathrm{cm}$ である。ピット 2 からは大振りの甕が出土している。SI002 に接する北側床面の一部には焼けて赤化した部分が認められた。

遺物は少ない。4は小型坩である。口縁が直線的に開き、屈折して胴部に至る。胴部は小さく張り、底部は少し上げ底状に窪む。内外面とも荒れて調整痕が不鮮明だが、口縁部から胴部中ほどまでミガキ痕が認められる。5・6は甕である。実測図上では復元径に差があることから別々に図示したが、焼成や胎土、器



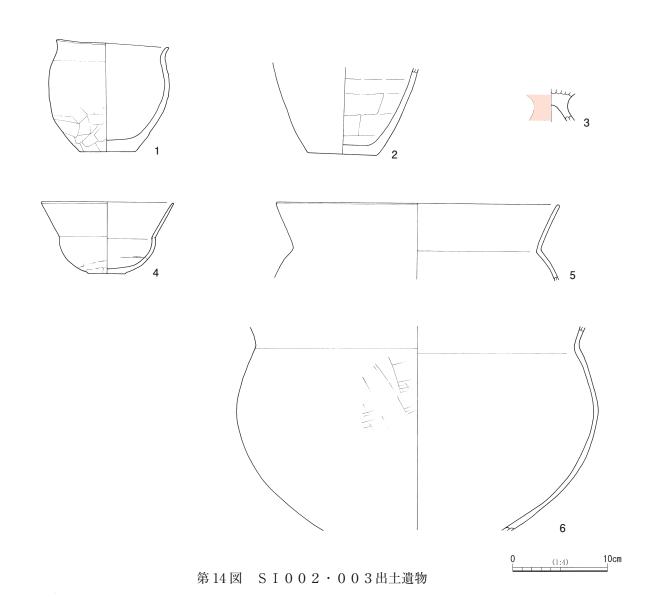


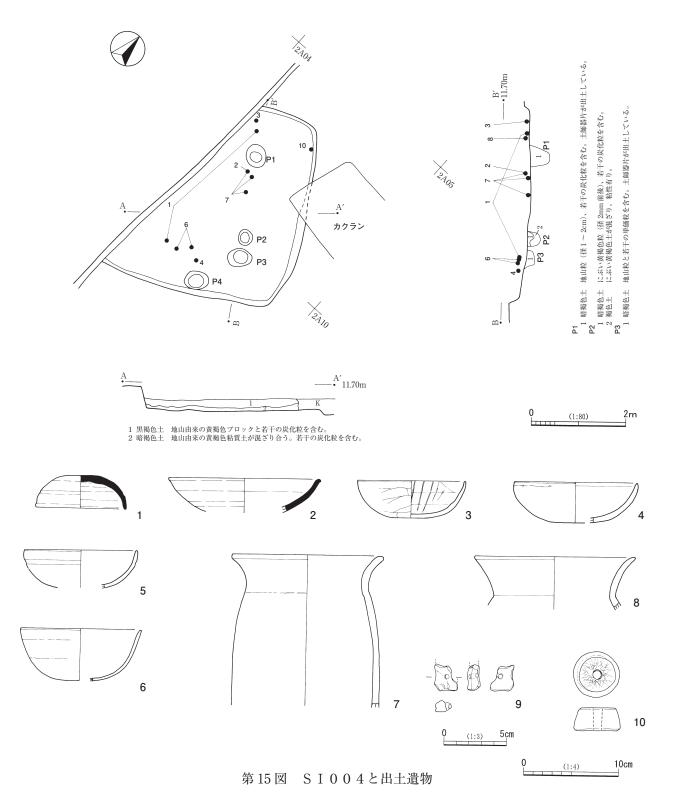
面調整、厚さが共通することから、同一個体と考えられる。5の口縁部は幅広でわずかだが輪積み痕が残っている。6 は大きく張る胴部で推定最大径は38cmとなる。内外面ともナデ調整を施し、胎土に砂粒が多く含まれる。このほか、床面上で礫が5 点出土している(図版3)。礫はすべて砂岩で、最大長32cm ~ 20 cm、重さ9.3kg ~ 1.5 kg である。特段に加工された痕跡は認められなかったが、すべて火熱を受けている。本住居跡の時期は4の小型坩の形態から、古墳時代前期の所産と考えたい。

S I 0 0 4 (第15 図、図版3・11・16)

調査区の北側、 $2A04 \cdot 09$ グリッドに位置している。北壁の一部から西側は崖面で遮られ、調査できなかった。また、東側の一部は耕作により攪乱を受けていた。平面形は方形になると思われ、南北方向で4.1m の長さである。床面は壁側から住居中央に向かって緩く傾斜し、全体に起伏がある。深さは確認面から 34 cm ~ 21 cm ~ 20 cm ~ 21 cm ~ 20 cm \sim

遺物の全体量は少ないが、床面上とやや上で出土したものが多く、須恵器・土師器のほか石製紡錘車などがある。1 は須恵器蓋坏でいわゆる合子状蓋と呼ばれる形態である。天井部と口縁部との境に沈線が入





る。外面口縁部の約 1/3 は自然釉がかかり、器面が荒れている。この個体は 3m ほど離れた位置から出土した破片が接合している。2 は須恵器高坏の坏部である。口縁部がわずかに外反し、体部で緩やかにすぼまる半球形の形態となる。口唇部上端の形状は丸く収まるが、擦れて平たんな面が表れている。胎土に細砂粒が多く入るためか、器面全体がざらついている。 $3\sim6$ は土師器坏である。体部は概ね丸みをもって立ち上がる形態である。3 は内面に輪積み痕を残し、放射状の暗文が微かに認められる。また外面底部は黒色である。4 は口唇部端が尖りぎみで、口縁部に輪積み痕が残っている。5 は口縁部と体部の境がわず

かに屈曲する。6 は器高があり、深めの形態で、口唇部がわずかに屈曲する。7・8 は土師器甕である。両者とも胎土に大粒の砂粒を多く含む。7 は長胴タイプで口縁部から胴部中位まで残っている。口縁部と胴部の境で弱く屈曲する。調整は口縁部を横ナデ、胴部は器面が荒れているため、不明瞭である。9 は用途不明の土製品の一部である。表面は比較的滑らかで、一か所に径 3.5mmの孔が開けられている。最大長20.1mm、最大厚 8.8mmである。10 は石製紡錘車である。滑石製で、上面と底面に放射状の条線が認められる。最大径 36mm、重さ 42.25 g である。

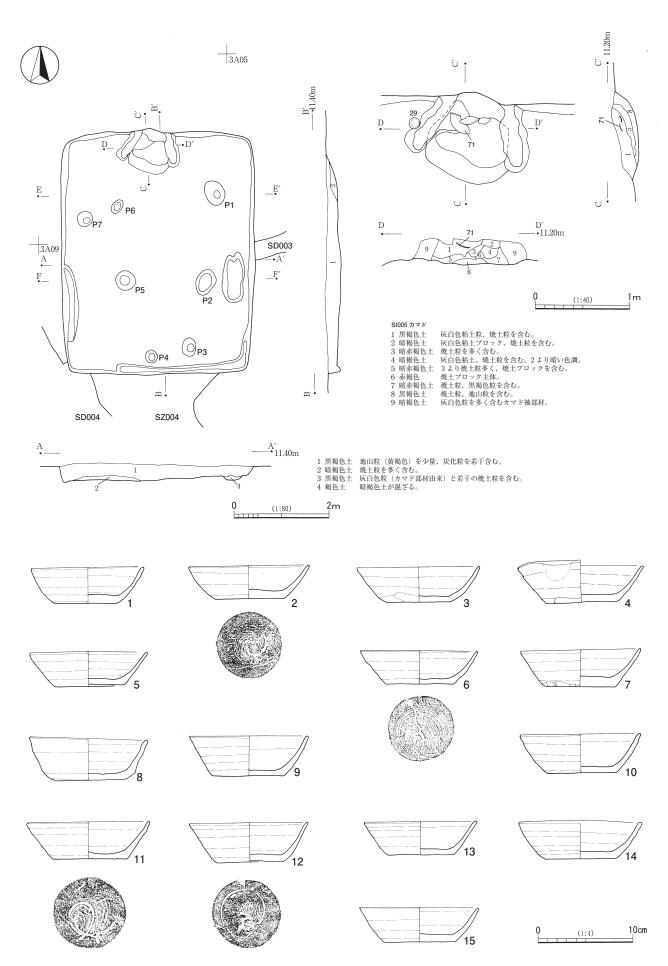
本住居跡の時期は須恵器、土師器の坏類の形態から、7世紀中葉に位置づけられる。

SI005(第 16 ~ 20 図、巻頭図版、図版 3 ・ 4 ・ 11 ~ 14・ 17)

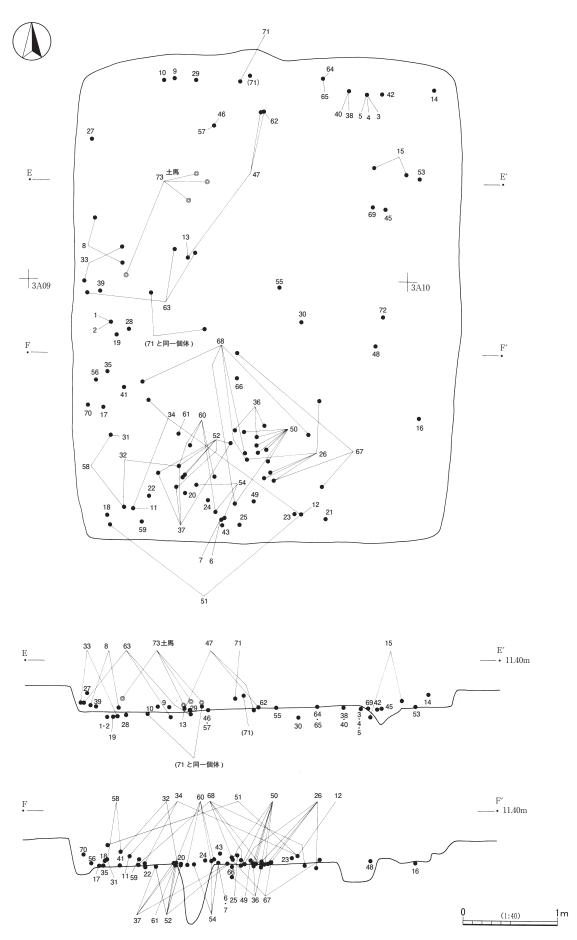
調査区南側、3A04・09 グリッドに位置する。平面形は長軸を南北方向にとる長方形で、規模は長軸5.1m、短軸4.13 mである。カマドを北壁中央に設けている。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは東側で18cm~13cm、西壁側で28cm~25cmである。壁溝は西壁、南壁の一部で検出されたが、西壁側は深さ4cmほどの浅く窪む程度であった。南壁側は深さ10cmで明瞭な溝が認められた。柱穴は7基検出された。位置や規模が不規則であるが中央寄りにあるP1~P4が主柱穴と考えられる。最大径57cm~27cm、深さ64cm~8cmと幅がある。壁際に位置するP5~P7の規模は最大径38cm~28cm、深さ14cm~9cmである。また、東壁側では不整形の土坑が検出されたが、用途は不明である。規模は長さ1.08 m、深さ11cmである。カマドは袖部、燃焼部、煙道部が残っていた。袖部は暗褐色土と灰白色粘土を主要な部材として構築され、左袖側はかなり崩れた状況であった。燃焼部の掘り込みは浅く7cmほど窪んでいる。なお、カマド内堆積土から第20図71の扁平な土師器破片が出土している。

遺物は土師器坏・蓋・皿類や土馬が出土した。土師器類は供膳用土器が多く、かつ完形土器が多いこと、 焼成の際に生じたと思しき歪みや割れ、ヒビのある製品が目立つ点も特徴の一つである。出土状況を全体 的に見ると住居跡南西側に多く、中央付近から東側は散漫な状況であった。特に南壁から西壁側では土師 器蓋坏類が住居壁際から崩れ落ちるような状況で、あるものは斜めに、あるものは逆さまになった状況で 出土した。第19図58・59の蓋や第16図11の坏、第18図25・43の坏、第19図54の皿などがそれらに 該当する。また床面上には重なったまま(入れ子状)出土した土器も多い。坏類では第16図1・2の2点 が西壁側、同図7・6の2点が南壁側で出土した。また、第16図3・4・5の3点と第18図38・40の2点 がカマド右側で出土し、これらに接するように第19図64・65の台付甕2点がやはり重なって出土した。

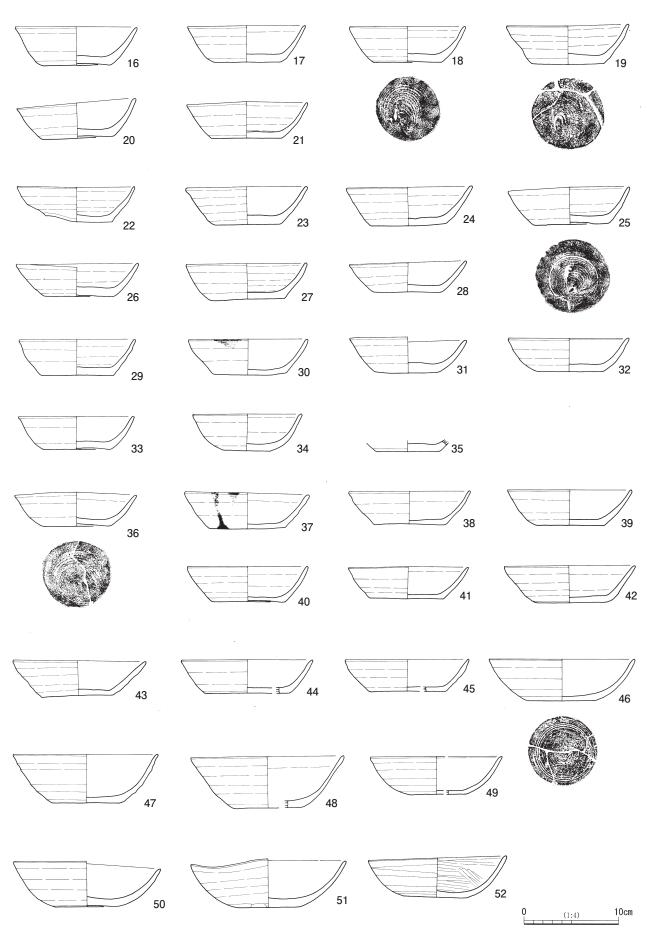
1から52は土師器の坏類である。すべてロクロ成形で、底部調整が分かるもののうち、中央に糸切り痕を残し、周縁をナデ調整するもの19点、底部全面をナデまたはヘラ削り調整するもの32点である。法量は口径12cm~13cm、底径7cm~8cmの範囲に収まるものが大部分である。器形からみると、体部が比較的直線的に開き、口径と底径の差が少ない箱型の類で、底部が比較的厚く持ち重りがする8~15、体部が丸みを持ち、口縁部が外反する16~34、口径と底径ともに大きく、口縁が開く36~45、口径が大きく器高が高く(深い)椀型に近い46~52がある。このタイプは調整が丁寧で52のように内面をミガキ調整で仕上げているものがある。53~57は皿で54・55は削り出し高台である。55は大きく歪み、内面をミガキ調整で丁寧に仕上げている。58~60は凹型の摘みが付く蓋で、内面を丁寧に仕上げている。59は大きく歪み、60もヒビが入る。61・62は有台の椀で、内面にミガキ調整のうえ黒色処理が施される。63~66は台付甕及び台部である。器壁全体が薄く作られている。67・68は甑の破片で同一個体だが接合しない。器壁が厚く、大型になると思われる。68には把手が剥がれた痕が認められる。69も同類の破片と思われ、一条



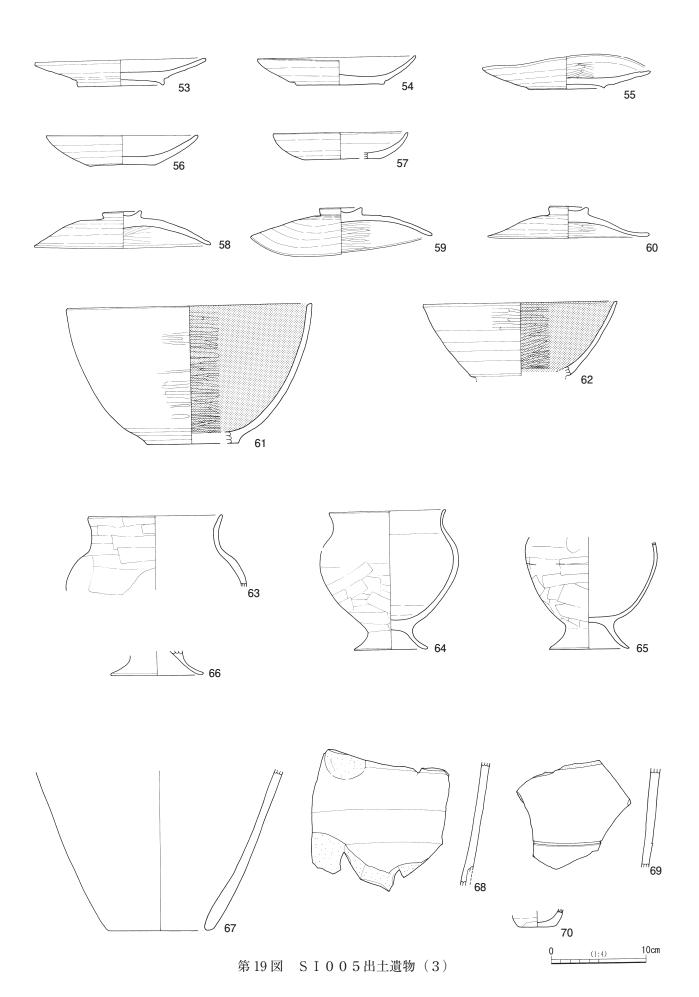
第16図 SIOO5と出土遺物(1)

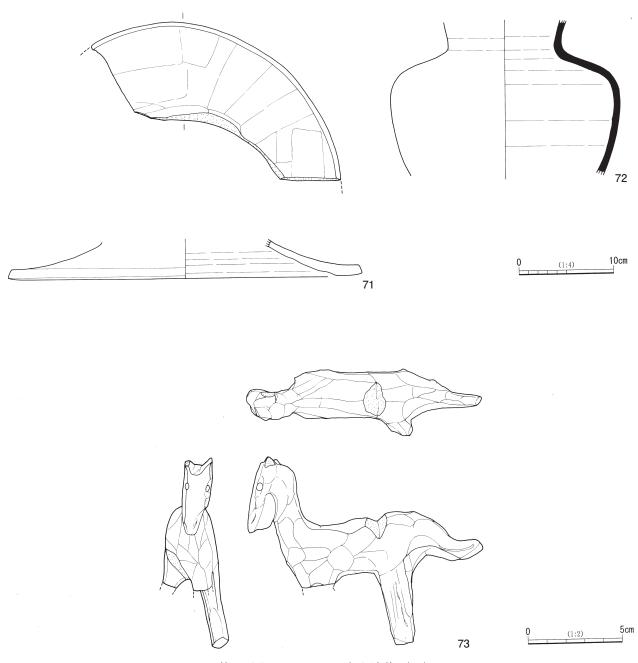


第17図 SIOO5遺物出土状況



第18図 SIOO5出土遺物 (2)





第20図 SIOO5出土遺物(4)

の筋が入る。70 はミニチュア土器。内外面とも丁寧にナデ調整される。71 は蓋と思われる個体である。推定径が 38cmの大口径となる製品で、口唇部は角状に面取りされ、中央部に向かって反り気味に立ち上がる器形となる。ロクロ成形で、内面、外面ともヘラナデ調整である。外面は粗い調整痕を残す割に丁寧な造りである。同じ破片が他に 2 点あるが接合はしない。72 は須恵器壺である。頸部から胴部の破片で、肩が大きく張る。広口壺となろうか。外面に光沢のある自然釉が掛る。73 の土馬は右後脚以外の脚部と左耳端部、胴部背中の一部を欠くが、頭部から尾部までほぼ全容がわかる資料である。頭部は顔をやや右に傾ける。裏側からの観察では、頬の部分で粘土を内側へ折り返していることが分かる。頸から尻尾にかけてヘラ状工具でなでて細部まで丁寧に仕上げている。全長 12.4cm、全高 10.0cmである。住居跡の時期は坏・皿類の共伴関係から 9 世紀中葉に位置づけられる。

S I 0 0 6 (第 21 図、図版 4)

調査区西側、2A13・14・18・19 グリッドに位置し、南側を SI007 に切られている。西側は崖面に接しているため、遺構の半分ほどの調査に留まった。また、遺構確認面は北側から南側へ約 50cmの高低差で傾斜している。平面形は検出された部分の状況から長方形になると推定される。規模は東壁側で 5.88 mである。底面 (床面) は北側から南側に向かって緩やかに傾斜 (高低差約 30cm) しており、通常の住居跡でみるような硬化した床面が存在しない。また、柱穴も検出できなかった。壁は北壁から東壁中央付近まで垂直に近い角度で立ち上がるが、それ以南では角度が緩く開き気味となっている。確認面からの深さは北壁側で 33 cm~ 26cm、東壁側から南壁の一部で 35cm~ 13cmである。検出された範囲では炉跡や柱穴等住居跡と考えられる施設が無く、生活痕跡の希薄な遺構である。

遺物は少なく、散漫な出土状況であった。図示できたのは高坏の脚部2点である。1は外面を縦方向のミガキと赤彩が施され、透かし孔が2か所認められる。坏底部はナデ調整である。2も外面に赤彩を施している。この他覆土中から小型壺の口縁部や刷毛目痕の残る甕の破片等が出土していることから、古墳時代前期に位置づけられる。

S I 0 0 7 (第 21 図、図版 4 · 16)

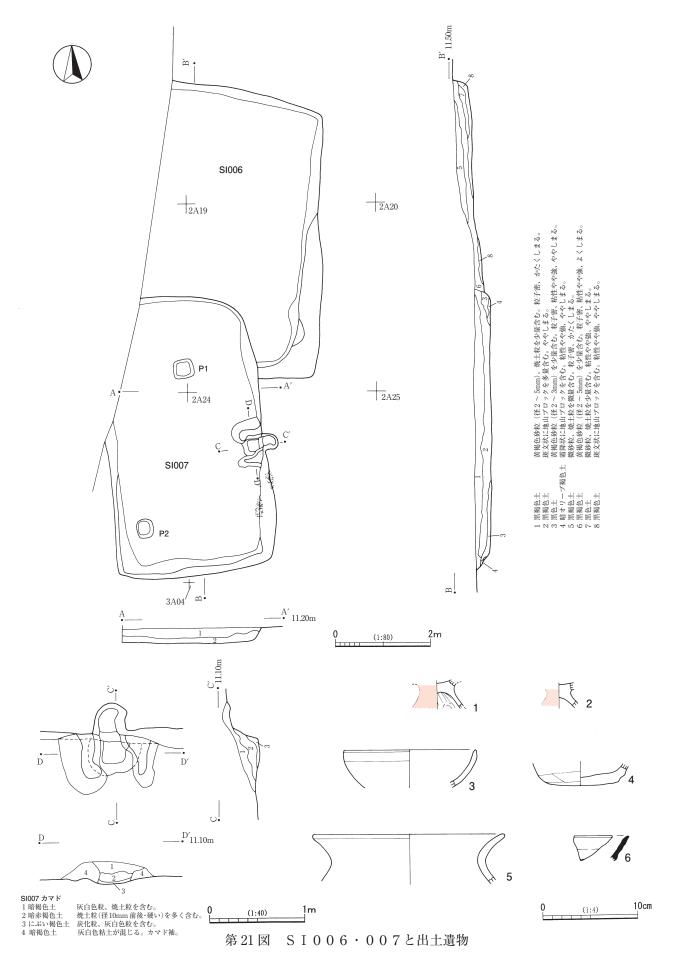
2A18・19・23・24 グリッドに位置し、北側の SI006 を切っている。同じく北西側の一角が崖面に接するため、全体を検出できなかった。平面形は長軸方向を南北に向ける長方形で、長軸 5.94 m、短軸 3.45 mである。カマドを東壁に設けている。床面は地山の黄褐色土を主に灰白色粘質土混じりの黄褐色土で貼床され、ほぼ平坦である。確認面からの深さは 31cm~26cmである。ピットが北側中央と北西隅の2か所で検出されたが、何れも深さ4cm前後と浅いため、柱穴としては考えにくい。カマドは袖部、燃焼部、煙道は残っていた。袖は暗褐色土と灰白色粘土で構築され、煙道の壁面は階段状になり、上段は壁外に30cmほど張り出している。燃焼部下は半円形に掘り窪め火床としている。

遺物は少なく、図示した4点の他は土師器甕類の破片が散在して出土している。また、遺構確認段階で上層からスラグが集中的に出土したが、これについては後述する。3は土師器坏で、体部から口縁部まで内湾して立ち上がり、口唇部が僅かに屈曲する。体部はヘラ削りで口縁部との境に弱い稜が認められる。4は土師器坏の底部である。丸底で器壁が厚く、全体に造りが雑である。5は口縁部が大きく外反する土師器甕の口頸部である。推定される口径は22cm程度で、球形の胴部をもつタイプと思われる。6は須恵器の口縁部である。小破片で器種の特定が難しいが聴のような小型壺を想定した。下端の強い屈曲が特徴的である。遺構の時期は3の土師器坏の形態から7世紀前半に位置づけられる。

2 竪穴状遺構と土器集中箇所

SZ001(第22図、図版4·14·17)

SI005 の東、3A10 グリッドで検出された土器集中と土坑、硬化面の集合である。検出された層位は第Ⅲ 層黒褐色土下部から遺構確認面の第Ⅳ層黄褐色土層上面で、竪穴住居のような施設を伴わず、楕円形の土坑とその周囲約 1 mの範囲に土器類がまとまっていた。土坑の規模は長軸 72cm短軸 57cm、深さ 10cmである。土坑を中心に出土状況を見ると、須恵器坏と土師器坏は上から 1 ・ 2 ・ 3 の順に重なり、それらに接して 4 の椀鉢、土坑中央の礫を介して 7 の壺、さらに中央からやや外側、土坑壁面に接して 5 の鉢がある。8 の甑は土坑から約 20cm離れた位置にある。6 の甕は横転して潰れた状態にあり、周囲の地面は火熱により赤化して、甕の下は 5 cmほど窪んでいる。この赤化部分から甑周辺は 1 m× 2 mほどの範囲に硬化面が



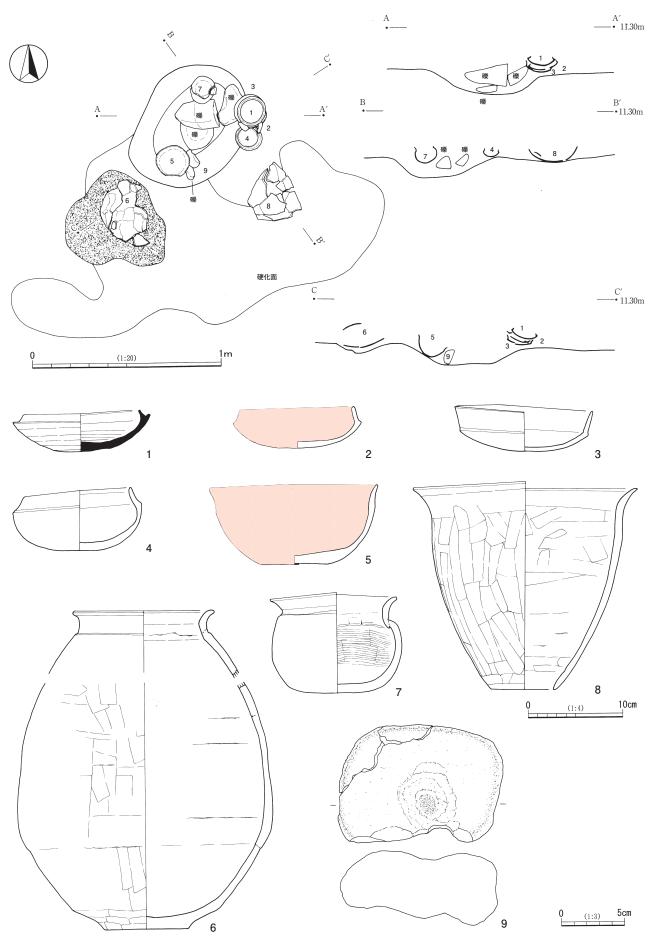
存在する。土器類は坏・鉢・甑・甕が揃い、生活を営むに足る良好なセット関係である。炉とみられる遺構も存在することから、平地式の建物があった可能性が感じられる。

1は須恵器坏身である。丸底で口唇部が小さく立ち上がり、内傾する。底部の調整は体部の1/3程を回転へう削りで、中心部を削り残している。内外面とも青灰色で、胎土の白色粒が目立つ。2・3は土師器坏である。2は須恵器模倣坏で、口縁部と体部の境の稜が明瞭で突出する形態、3は須恵器蓋模倣坏で体部との境の稜が明瞭で、口縁部がわずかに外反する。4は深い椀形態の坏である。口縁と体部の境の稜が明瞭で、口縁部が内傾してわずかに反る。5は椀である。平底の底部から体部が丸みをもって立ち上がり、弱く屈曲して口縁が外傾する。内外面に赤彩を施す。6の甕は長胴タイプで下膨れの胴部が特徴である。7は小型の甕である。全体に歪みのある造りで、偏屈な胴部に外反する口縁が付く。内面には胴部と口縁部の接合部が残り、胴部に粗い刷毛目調整が残る。胎土に大粒の砂粒を含む「安房型甕」である。8は甑で、最大径を持つ口縁部から胴部が次第にすぼまる形態である。甕、甑の類は胎土に粗い砂粒が目立つ。9は椀5の下、土坑底面から出土した凹石で、表裏と図上部側面に窪みがある。長さ13.1cm、幅9.1cm、厚さ6.1cm、重さ0.7kgである。土器群は須恵器坏の形態が陶邑編年TK43型式に類する特徴をもつことから、6世紀後半の時期に位置づけられる。

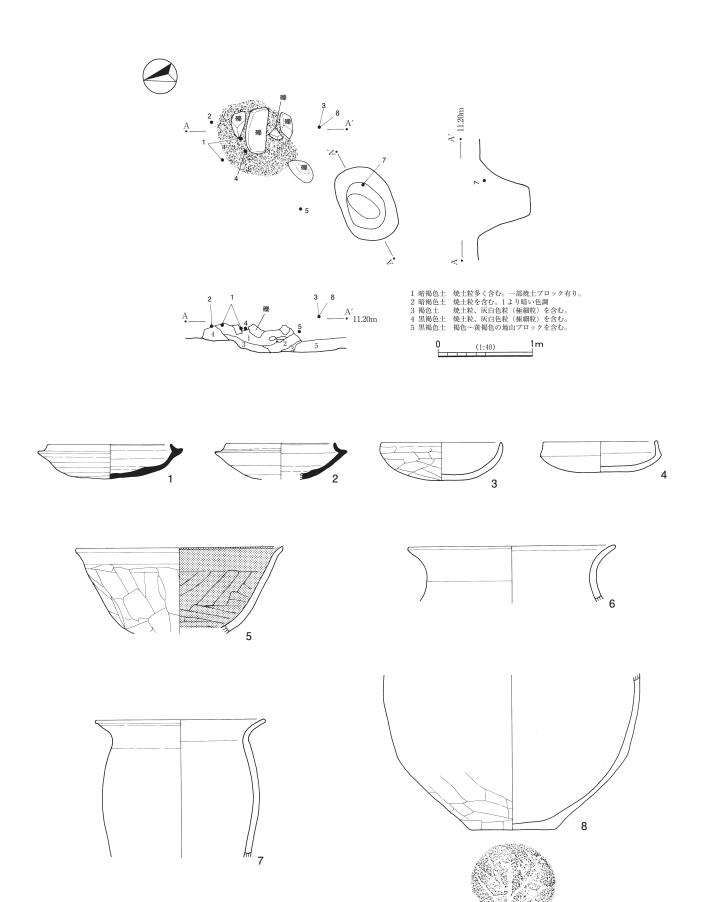
SZ003 (第23 図、図版5·15)

調査区の南端、3A13 グリッドに位置し、SD004 の西 1 mの距離にある。SZ001 と同様、第Ⅲ層中に検出された坏・甕類の遺物集中と礫片を伴う焼土面、ピットで構成される遺構である。焼土面は 0.9 m× 0.7 m の範囲に広がり、この層中に厚さ 10cm前後の扁平な直方体の泥岩片 3 個が「川」の字状に並んでいた。中央の泥岩片が最も大きく、長さ 50cm、その両側は長さ 30cm前後である。泥岩片の下層は焼土粒や焼土ブロックを含む土が堆積し、地山面から 10cm程浅く窪んでいた。一方、焼土面の西側には長軸長 82cm、深さ約 60cmの楕円形のピットが存在する。土器類は泥岩片と同じレベルかやや高い位置にあり、中央の泥岩片のやや東に須恵器坏 1・ 2 と土師器坏 4、やや離れた周囲に土師器坏 3 や鉢 5 があり、ピット内から甕 7 が出土した。神奈川県相模地域ではカマドの心材に加工された礫片を多用する例が多く、この遺構もそうした例と同様の機能=礫片を組んだカマドのような施設と建物跡があった可能性が高い。

1・2は須恵器の坏である。1 はほぼ完形で、扁平な丸底の体部と口縁部が小さく立ち上がり内傾する。底面は回転へラ削りで中央部が削り残される。色調は青灰色で、胎土に白色粒が目立つ。2 は約 1/2 の破片である。1 よりやや深めで、体部の中ほどまで回転へラ削りが及んでいる。また口縁部の立ち上がりもやや強い角度である。色調と胎土の特徴は1 と同じである。3・4 は土師器の坏である。3 は丸底で体部から口縁が丸みを持って立ち上がり、口唇端が尖る。体部はヘラ削り調整で、口縁部との境にわずかな稜を意識している。4 は扁平な体部の坏で、口縁部との境に明瞭な稜を持ち、わずかに屈曲して口縁部が内傾気味に立ち上がる。5 は鉢である。体部外面は幅広の工具でヘラ削りし、口縁部との境に弱い稜を持つ。内面には黒色処理を施す。6~8 は甕である。7 は口縁部に最大径をもつ長胴タイプであり、6 も同様の器形であろう。8 は底部に木葉痕が残る。坏を含め土師器類の胎土、焼成が異なる点が注目される。7 はいわゆる「安房型」の特徴である、粗く大粒の砂粒が目立ち焼成が甘い。6 は固くよく焼しめられている。坏類も3・5 は細かな砂粒が多く、表面が砂っぽいのに比べ、4 では胎土の砂粒が大粒でかつ白色粒が目立ち、固くよく焼きしまっているという違いがある。3・5・7 が在地産、4・6 が搬入品の可能性がある。遺構の時期は須恵器坏の形態が陶邑編年 TK209 型式に類することから6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる。



第22図 SZ001と出土遺物



第23図 SZ003と出土遺物

10cm

(1:4)

SZ002 (第24図、図版5·15)

調査区の南端、3A20・25 グリッドに位置する竪穴状遺構の一部分である。確認面からの深さは3cm~4cmで木根の攪乱を受けて壁の状況は良くない。底面の一部に径30cmほどの範囲で焼けた痕跡が認められ、その周囲は固くよく締まった状態である。焼け面自体に掘り込みは無く、通常の竪穴住居跡にみられるような炉跡とは言い難い状態であったが、東側の壁際底面から甕下半部が出土した他、輪積み痕のある甕口縁部細片と台付甕脚部細片が出土しているため、弥生時代後期の居住遺構である可能性が高い。

1は甕の胴下半部である。残存部の状況から球形に膨らむ形態の胴部になると思われる。

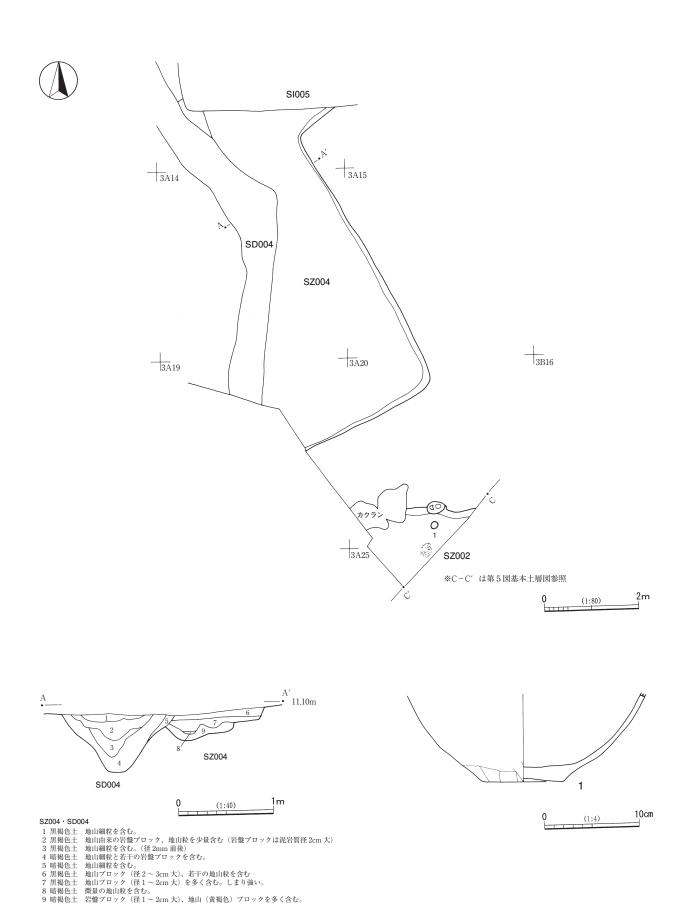
SZ004 (第24図、図版5)

調査区の南端、3A14~20グリッドにまたがって検出された竪穴状遺構の一部である。西側をSD004、北側をSI005に切られている。検出した範囲は長辺が南東~北西を向く方形プランの一角にあたる部分で、南辺側3m、東辺側5.9mである。方形プランを想定すると溝SD004の反対側(西側)にかかるが、この付近ではなにも検出できなかった。確認面から底面までの深さは全体に浅く、14cm~6cmである。底面は黄褐色土ブロック、灰白色粘質土、黒褐色土の混合土が5cm前後の厚さで敷かれており、固く締まりのある状態であった。遺構内には柱穴や炉跡、カマドなど住居跡に伴う施設が一切存在しない。遺物は少なく、散漫な出土状況である。すべて土器小片で図示できるものはないが、刻み目のある甕の口縁部や輪積み痕を残す口縁部片があり、弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

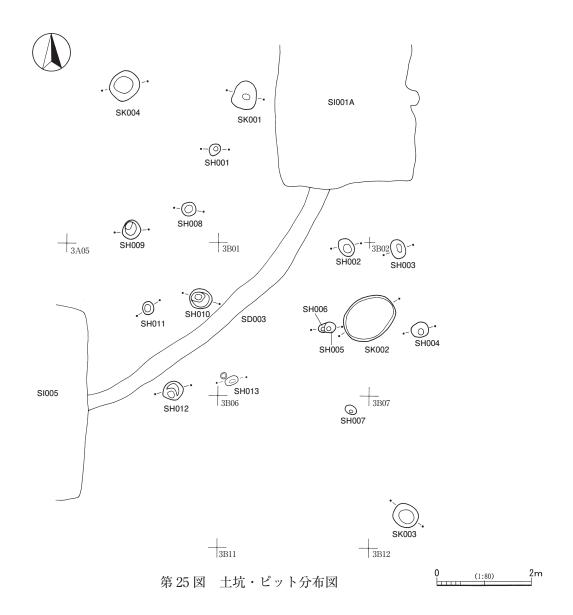
3 土坑とピット (第25・26 図、図版5・6)

土坑とピットは遺構群のほぼ中央、SI001 と SI005 の間の区域で、ちょうど地山層が北から南へ傾斜して平坦面を形成するあたりに分布している。ピットは連携して建物跡を構成するような配置ではなく、それぞれ単独の遺構と判断した。

- **SK002** 3B01・02 グリッドにまたがって位置する。平面形は長軸 $1.4\,\mathrm{m}$ 、短軸 $1.07\,\mathrm{m}$ の楕円形で、深 さは $8\,\mathrm{cm}$ である。底面はほぼ平坦で、浅い割に壁の立ち上がりがしっかりしている。遺物はない。
- SK003 3B07グリッドに位置する。平面形は径 $68cm \times 61cm$ のほぼ円形で、深さは 20cmである。底面はわずかに起伏があり、壁が緩やかに立ち上がる。遺物はない。
- SK004 $2A20 \cdot 25$ グリッドにまたがって位置する。平面形は径80cm×73cmのほぼ円形で、深さは26 cmである。底面は椀状に中央が深くなり、壁が緩やかに立ち上がる。遺物は土師器の甕底部片ほか5点ほどの破片が出土している。
- SH001 2A25 グリッドに位置する。平面形は径 30cm × 27cm のほぼ円形で、深さは 25cm である。土師器破片 1 点が出土したが、器種は不明である。
- SHOO2 3B01 グリッドに位置する。平面形は長径 42cmの楕円形で、深さは 26cmである。
- SHOO3 3B02グリッドに位置する。平面形は長径50cmの楕円形で、深さは24cmである。土師器破片1点が出土したが、器種は不明である。
- SH004 3B02 グリッドに位置する。平面形は径 40cmのほぼ円形で、深さ 37cmである。土師器破片 3 点が出土したが、器種は不明である。
- SHOO5・OO6 3B01グリッドに位置し、大小二つのピットが重複し、005が006を切っている。規模は005が径24cm、深さ22cm、006が径20cm、深さ15cmである。
- SH007 平面形は長径33cmの楕円形で、深さ10cmである。覆土は黄褐色粒を含む黒褐色土の単層である。



第24図 SZ002・004と出土遺物



SHOO8 2A25 グリッドに位置する。平面形は径 32cmのほぼ円形で、深さ 38cmである。

SHOO9 2A25 グリッドに位置する。平面形は径41cmのほぼ円形で、深さ25cmである。

SH010 3A05グリッドに位置する。平面形は径61cmのほぼ円形で、深さ16cmである。

SHO11 3A05グリッドに位置する。平面形は長径28cmの楕円形で、深さ24cmである。

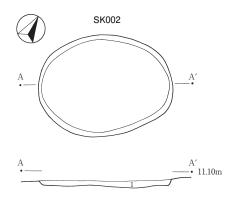
SH012 3A05グリッドに位置する。平面形は長径55cmのほぼ円形で、深さ28cmである。遺物は、土師器破片3点が出土し、うち1点は古墳時代後期の土師器坏口縁部の破片である。

SH013 3B01 グリッドに位置する。平面形は長径 37cmの楕円形で、深さ 20cmである。遺物は土師器破片 1 点が出土したが、器種は不明である。

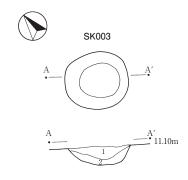
4 溝

SD001 · 002 · 003 (第27 · 28 図、図版6 · 7 · 15)

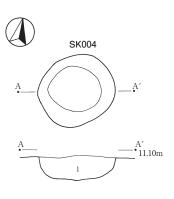
SD001 と SD002 は調査区の東側、遺構群の東端を南北方向に延びて交差する。SD003 は南西から北東 に調査区中央部を縦断して SD001 と交差・合流する。また、SD003 は SI001A・B と SI005 に切られている。 溝同士の新旧関係は(古)SD002 → SD001 → SD003(新)である。



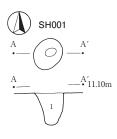
1 暗褐色土 褐色土、黄褐色粒を含み、しまりあり。



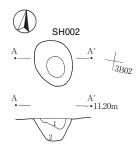
1 黒褐色土 黄褐色粒を含む。 2 暗褐色土 褐色、黄褐色粒を多く含む。



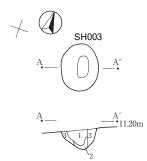
1 黒褐色土 黄褐色粒、径 5mm 以下はまんべんなく、 径 20mm はまばらに含む。礫片、土器片 出土。



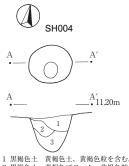
1 黒褐色土 黄褐色粒をわずかに含み、 しまりあり。土師器片出土。



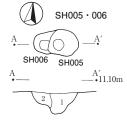
1 暗褐色土 褐色土を含み、しまりあり。 2 褐色土 黄褐色土を少量含む。



1 黒褐色土 黄褐色粒を少量含む。
 2 黒褐色土 褐色土をブロック状に含む。
 3 暗褐色土 褐色土をブロック状に含む。

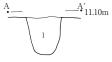


1 黒褐色土 黄褐色土、黄褐色粒を含む。
 2 黒褐色土 黄褐色ブロック、黄褐色粒を多く含む。
 3 黒褐色土 黄褐色土、黄褐色粒を少量含む。

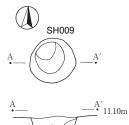


1 黒褐色土 黄褐色土をわずかに含む。 2 暗褐色土 黄褐色土、黄褐色粒を含む。

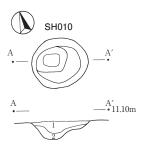




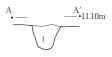
1 黒褐色土 黄褐色粒をわずかに含み、 しまり有り。土師器片出土。



1 黒褐色土 黄褐色細粒 (1 ~ 2mm 大) を含み、しまり有り。 2 黒褐色土 黄褐色土、黄褐色粒を含む。

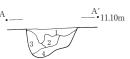


1 黒褐色土 黄褐色微粒(1mm 以下)を含む。 2 暗褐色土 褐色土を含む。



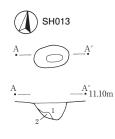
1 黒褐色土 黄褐色細粒、少量の褐色土を含む。





1 黒褐色土 岩盤粒 (径 2cm 大)、黄褐色微粒を

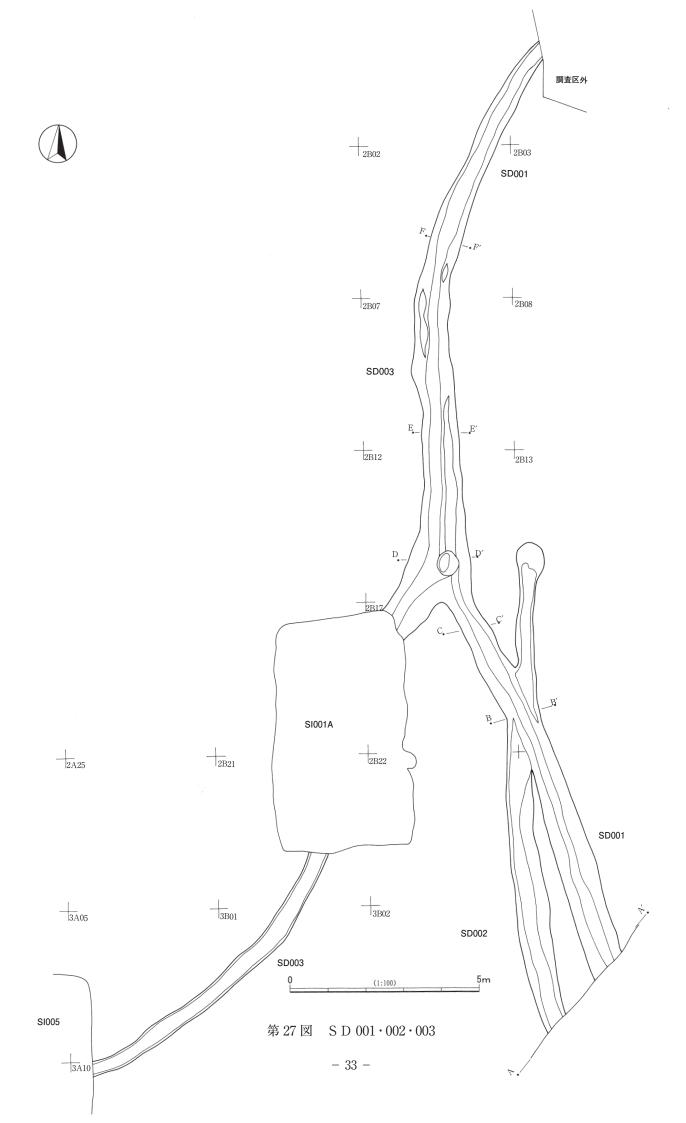
会む。 会む。 2 黒褐色土 黄褐色粒(径2~5mm)を含む。 3 暗褐色土 黄褐色粒を含む。 4 暗褐色土 褐色土が混ざる。

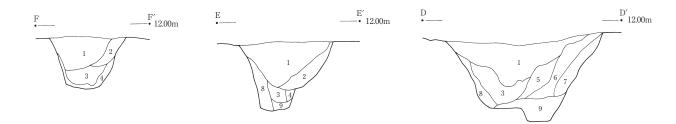


1 黒褐色土 黄褐色粒を含む。 2 暗褐色土 黄褐色粒を多く含む。



第26図 土坑・ピット





F - F' 土層

F ー F ・ 土層

1 褐色土

2 黒褐色土

2 黒褐色土

黒褐色土を主体とするが、丸い褐色土ブロック(径1 ~ 2cm)を多く含む。砂粒、地山・ハブロック(径0.5cm 以下)を多く含む。砂粒、地山・ブロック(径0.5cm 以下)を多く含む。砂粒を 継めて多く含む。ブロックは少ない。

3 褐色土

4 黒褐色土

2 に近いが砂粒ブロックとも2より少ない。

E-E'、D-D' 土層

E-E'、D-D' 土層

1 黒褐色土 細かい焼土粒、砂粒を均一に多く含む。

2 黒褐色土 1にブロック状の砂粒を多く含む。

3 黒褐色土 焼土粒、砂粒を多く含む。1より粒子が大きいものを含む。

4 黒褐色土 3にブロック状の砂粒を多く含む。

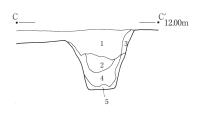
5 暗褐色土 細砂粒を多く含む。

6 暗褐色土 砂粒の一部がブロック状になる。

7 褐色土 砂粒、地山ブロック(径05~2cm)を含む。

8 黒褐色土 細粒粒、焼土粒に加え、地山ブロック(径0.5~1cm)を極めて多く含む。

9 褐色土 地山ブロック(径1~2cm)を多く含む。



C-C, ±

 C - C' ±

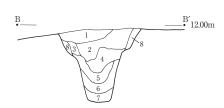
 1 黒褐色土

 2 オリーブ褐色土
 砂粒、径 1cm 以下の地山ブロックを 極めて多く含む。

 3 褐色土
 黄色砂粒を多く含む。

 4 黒褐色土
 砂粒、地山粒を含む。若干の地山ブロック、黄褐色ブロック(径 1cm 以下)を含む。

 5 にぶい黄褐色土
 地山粒、黒褐色土を含む。



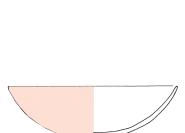
B - B' 土層

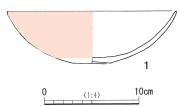
- 12.10m 2 3 SD001 SD002



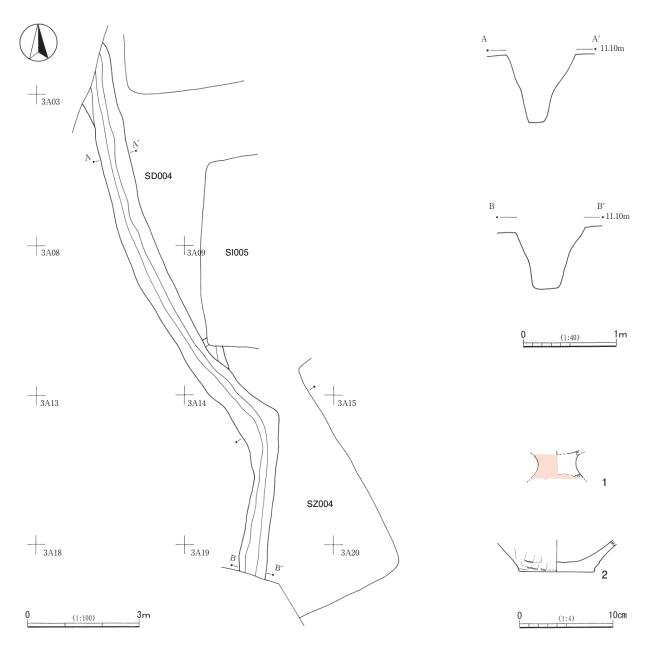
A - A' 土層

耕作土、全体に軟質。 浅黄色の微粒をまんべんなく含む。 浅黄色粒(径 1 ~ 5mm)をまばらに含む。 3 層 + 略販質黄褐色を多く。 3 層 + 略販質黄褐色を多く。 4 層類似。4 層に比べ暗褐色土の混入がやや少ない。 4 層類似。4 層に比べ暗褐色土の混入がやや少ない。 3 層に多くの暗褐色土を含む。 3 層により多くの暗褐色土を含む。 3 層の黒角色土と暗褐色土からなる。と調が明るい。 3 層の黒角色土と暗褐色土からなる。略褐色土を斑文状に含む。 ※4・6 ~10 層は風化を受けた均等な土層で、自然堆積。 5 層は不均等で性格不明。 A-A, 土層
1 無色土
2 暗無褐色色土
4 暗點褐褐色色土
5 暗暗褐褐色色土
6 暗暗褐褐色色土
7 暗暗褐褐色色土
9 暗暗褐褐色土



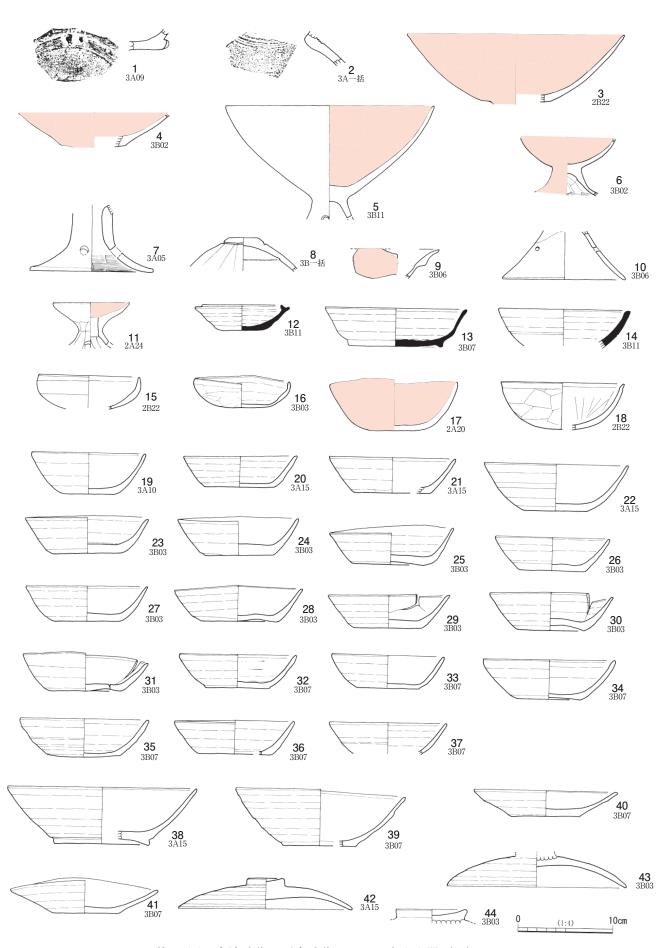


第28図 SD001・002・003 断面図と出土遺物

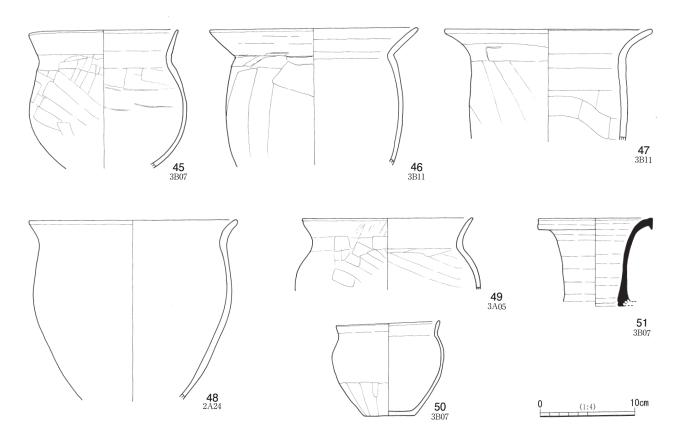


第29図 SD004と出土遺物

SD001 は幅 98cm~62cm、深さ 67cm~64cm、底面幅 32cm~20cmで、北端に向かって徐々に深くなっている。断面形状は薬研状である。SD003 と重複している範囲を含め延長 25 mである。SD002 は延長 13 m、幅 87cm~41cm、深さ 34cm~20cmである。底面は幅 30cm~20cmで平坦であり、断面形状は箱薬研に近い形状である。SD001 と交差し、北側で収束する。SD003 は SI001A・B の東側で SD001 と合流する。SD001 より幅がやや広く、浅めに掘り込まれる。SI001A・B から西側は地形が変化していくため、底面付近だけが検出された。SI005 の南西隅では SD004 が接する部分がかろうじて検出されたが、SD004 との前後関係は分からなかった。なお、断面図 F - F' の地点では SD001 と重複する状況が認められないことから、SD003 はこの直前で収束していると考えられる。第 28 図 1 は SD001 の覆土中で出土した椀である。小径の上げ底状の底部から丸い半球形の体部をもち、口唇部断面は薄く尖る。外面はミガキ調整のうえ赤彩を施される。時期は古墳時代前期と考えられる。



第30図 古墳時代~平安時代グリッド出土土器(1)



第 31 図 古墳時代~平安時代グリッド出土土器(2)

SD004 (第図、図版7)

調査区の西端で南北方向に延びる溝で、延長約 15.5 mである。段丘面の外縁に沿った位置に掘られている。竪穴状遺構 SZ004 を切っている。溝は幅 $1.04~\text{m}\sim0.7~\text{m}$ 、深さ $71\text{cm}\sim61\text{cm}$ 、底面幅 $36\text{cm}\sim16\text{cm}$ で、掘方の断面形が SD001 と共通している。遺物は土器片が少量出土した。

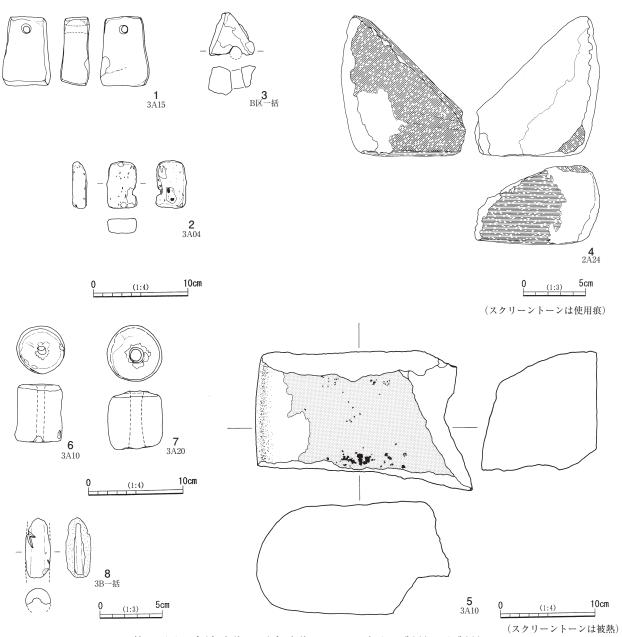
1は高坏の脚接合部である。坏底部内面は丁寧にミガキ調整、外面は縦方向のミガキ調整の後、横方向のへ ラなでをしている。2は底部で、内外面をナデ調整している。いずれも古墳時代前期に位置づけられる。

5 グリッド出土遺物

遺構に伴わない古墳時代から平安時代の土器類、石製品、土製品である。主に第Ⅲ層中から出土しているが、土器類では南東側 3B03・07 グリッドで集中が認められた。3B03 グリッド出土の坏類には焼成時に生じたと思われる歪みや割れ、ヒビが入った製品が目立ち、土器集中下層に焼土の堆積が認められた。また、鉄床石が 3A10 グリッドで出土した。

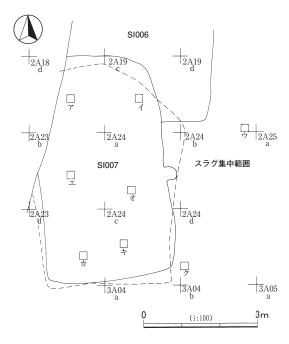
(1) 土師器・須恵器 (第30・31 図、図版7・15・16)

1 は壺型土器の有段口縁の下部で、一対の棒状浮文状の粘土粒が貼り付けられている。胎土に細かな砂粒を含み、焼成は良い。9 も有段口縁で赤彩を施されている。2 は小型壺の胴部上位である。頸部との境に幅の狭い櫛描文が施される。胎土に細かな砂粒を含み、焼成は良い。3~6 は高坏で、赤彩を施される。3・4 は脚部との境に稜をもつ。5 は大きく深い坏部で、脚の一部に透かし孔が認められる。4 は小型の坏で、脚裾部が広がるタイプと思われる。7・11 は器台、10 も小さな透かし孔が1つあり、器台の脚と思われる。8 は蓋とした。壺か甕の底部外縁に溝状の深く抉られた加工痕が残る。紐を結ぶなどして蓋として再利用したものであろう。以上1~11 は古墳時代前期の所産である。12・13 は須恵器の坏である。12 は完形で



第32図 古墳時代~平安時代グリッド出土石製品・土製品

ある。小型の製品で、口縁部が小さく立ち上がる。底部は平らで、中央部を残して回転へラ削りである。器形、法量から7世紀中葉に比定される。13 は高台付坏である。高台の断面は角型で外に開き、底部は高台内に収まる。胎土に白色粒が目立ち、断面の色調が赤みを帯びる特徴から陶邑製品と考えられる。時期は7世紀末。14 は蓋の可能性もあるが、口唇部が外反する形態から坏身若しくは高坏と考えた。15~18 は外面をへラ削り調整で整える坏である。15・16 は小振りで体部から口縁部が内湾し、器壁の厚さが一定していない。17 は大振りで、全体に歪む。底部内面を指先で押さえて整形している。18 は内面に放射状の暗文を施す。19~37 はロクロ成形の坏である。体部から口縁部が直線的に開く20のタイプと体部が丸みを持って立ち上がる27のタイプがある。また、25・29・30・31 は歪みや割れが入る。底部調整は19・27・30 が底面中央に糸切り痕を残し、他は全面をヘラ削りである。38・39 は高台付椀、40・41 は皿で、41 が大きくゆがむ。42 は蓋で凹型の摘みが付く。内面の調整は丁寧でミガキのような痕跡が認められる。43 も同



第33図 スラグ土壌サンプル採取位置

様の摘みが付くであろう。44 は摘みの部分である。45~50 は甕である。45 は胴部に丸く膨らみ、口頸部緩く外反する。頸部が一旦立ち気味となるところが器形の特徴で、49 も同類である。46・47 は頸部の屈曲が強く、口縁部が大きく開き、長胴となる。48 はその中間タイプで胎土に粗い砂粒を含む安房型の甕である。50 は小型で、胴部下位を縦方向のヘラ削りで整える。51 は須恵器長頸瓶の口頸部である。外面色調は灰色で、胎土に 3 mm~5 mm前後の白色粒が散見される。以上、45・48・49 の甕が古墳時代後期、15~44 の坏、皿、蓋類、46・47・50・51 が平安時代、9世紀中葉の時期である。

(2) 石製品・土製品 (第32 図、図版 17)

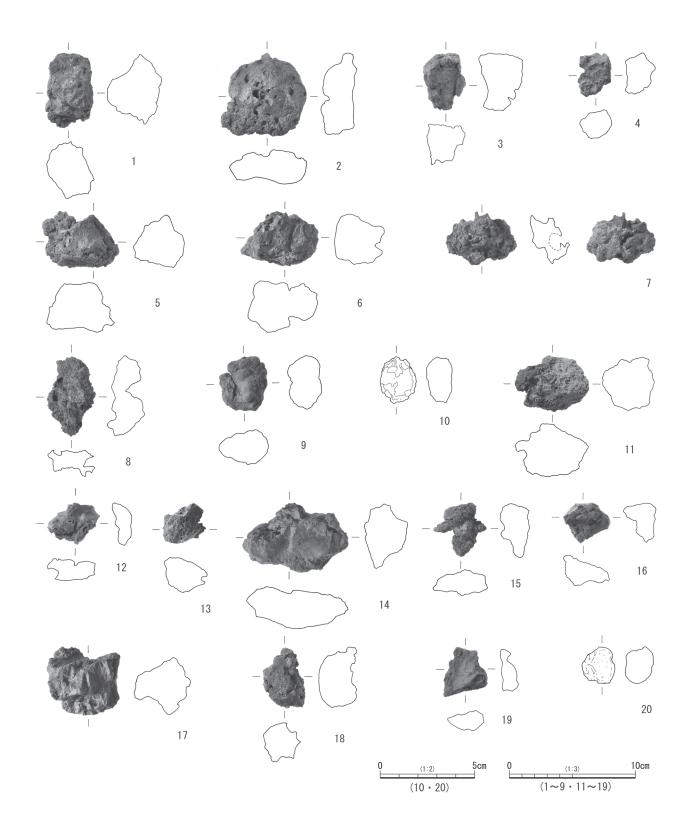
1~4は砥石で、3以外は凝灰岩製である。1・2は穿

孔のある提げ砥石。1 は完形で、上部に径 7.6mmの孔があけられる。表裏、側面とも滑らかで丁寧に使用されている。長さ 55.3mm、幅 38.6mm、厚さ 23.7mm、重さ 67.6g。2 は破片で、砥ぎ面が一部に残るのみである。現存している部分で長さ 37mm、幅 35.6mm、厚さ 22.8mm、重さ 14.3g。3 は軽石製で、右側面の一部が欠けている。長さ 37.8mm、幅 25.3mm、厚さ 12.4mm、重さ 2.7g である。4 は三角錐状の製品である。図の表面と右側面、下面に平滑な使用面が残っている。元々は長方形 (直方体) で、割れたものをそのまま再利用したのであろう。長さ 11.1cm、幅 9.8cm、厚さ 6.3cm、重さ 585.9 g である。5 は鉄床石の破片である。扁平な安山岩の平坦面を作業面としている。平坦な作業面と自然面を残す側面の一部にタール状の鍛造剥片が付着し、被熱して赤化している。長さ 22.8cm、幅 14.9cm、厚さ 12.7cm、重さ 5.5kgである。6・7 は円筒形の土錐、8 は細長い土錐である。6 は表面が滑らかな整形で、長さ 46.8mm、径 38.0mm、重さ 66.4g。7 は表面に白い塗膜のような付着物がある。長さ 46.7mm、径 44.0mm、重さ 94.4g である。8 は縦に割れ、現存長 45.9mmである。

6 製鉄関連遺物(第33・34図、図版7)

遺構検出作業の段階で第 \blacksquare 層黒褐色土層からスラグが検出されていた。特に竪穴住居跡 SI001A 付近と SI007 付近、 $2A18 \sim 24$ グリッドに集中が見られた。SI007 付近では1 グリッドを4 分割した上でまとめて 取り上げを行い、併せて微細遺物を確認する目的で8 カ所の土壌サンプルを採取した。ここでは、遺跡全体で出土したスラグをまとめ、観察・集計した結果を第34 図及び第1 表から第3 表に示した。なお、スラグの観察、分類にあたっては、神野 信氏の協力を得た。

スラグの観察では、①表面がすべて割れ口に囲まれた炉内滓のブロックが主体。②含鉄の炉内滓も多いが、鉄塊を咬み込むような鉄塊系のものが少ない。③炉壁(或いは炉底と思われる)が付着した炉内滓が多い。④溶解炉壁、炉内・炉外流動状滓が少ない(特に流動滓が無い)。⑤極めて少ないながら木炭の間で焼結した砂鉄の名残と思しき炉内滓がある。以上の特徴から本遺跡のスラグ類は、製錬あるいは精錬系の滓と考えられ、調査地点外に製錬・精錬炉の存在する可能性が高いと思われる。スラグ類の多くが包含されている第Ⅲ層中の土器類は、平安時代前期9世紀中葉段階が主体であることから、製錬・精錬炉の操業時期も9世紀中葉を下限として考えておきたい。



第34図 製鉄関連遺物

第1表 製鉄関連遺物観察表

挿図	番号	遺構番号	遺物番号	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	磁性	所見
144	ш.у	VE 117 ER - 7	及190日・3	TEAR	mm	mm	mm	g	MAA I II	
第34図	1	SI001	99	С	52.0	38.0	47.9	145.32	無	炉壁 (溶解) 一面に黒色ガラス化した炉壁痕が付着し、その対面は黒褐色の細かい凹凸に覆われた面をもつ。外周は破面に囲まれ、断面に径0.2mm大の気孔が散り、光沢をもつ線密質滓。
第34図	2	SI001	100	С	72.1	73.0	29.2	212.74	無	「炉内滓 全面破面に囲まれ、径1~8mm大の気孔が散り、光沢のある緻密 な滓。端部に発泡した灰色粘土、黒色ガラスが付着した痕跡があ る。
第34図	3	SI001	39	С	45.5	32.2	35.5	70.55	無	「炉内滓 (炉底滓) 下面に明灰色粘土塊、砂礫が厚く付着。側面の下部は黒褐色流動 面であるが上部にスサ入り赤褐色粘土が付着。破面に囲まれた滓 部は径1~3mmの気孔が散り光沢のある灰色を呈す。緻密質、磁 着なし。
第34図	4	SI001	54	С	37	26.4	26	29.39	有	「炉内滓 (炉底滓) 下面・側面に径2~5mm大の灰色粘土塊が付着する暗灰色の滓。 破面に光沢があり径1~6mm大の気孔があるが、緻密質。
第34図	5	SI001	98	С	58.1	40.4	39.4	122.5	無	「炉内滓 (炉底滓) 下面と直立する側面に灰色粘土が付着。下面は径1~2mm大の礫 状。側面は緻密なスサ入り粘土と異なる。 滓部は破面に囲まれ、径 1mmの気孔が散る光沢のある緻密な滓。
第34図	6	SI001	97	С	60.5	49.8	40.6	124.43	有	炉底滓(粘土付) 下面に径2~5mm大の灰色粘土塊が厚く付着し、その間から黒灰色で径2mm大の滓が滴状に突出する。側面は黒褐色流動面で径4~8mm大の赤褐色粘土塊が付着する。滓部は破面に囲まれ光沢のある緻密質滓。なお下面の粘土と滓の間に径8mm大の小さな木炭痕あり。
第34図	7	SI004	19	B1	55.0	41.6	25.5	37.66	無	炉内淬 上・下面とも錆色で細かい凹凸に覆われ、下面には径15mm前後の 木炭を咬み込む痕がある。軽量で磁着しない、多孔質の滓か。
第34図	8	SI004	19	B1	63	33.2	31	31.39	無	炉内滓 全面が錆色の細かい凹凸に覆われ径10mm大の木炭を咬み込んだ 痕がある。軽量で磁着しない。
第34図	9	SI005	110	D	45.7	40	33.9	63.85	有	鉄塊系 惰円形で一部に凸があるが、錆による付着土砂によって形は不明。 放射状のワレが入り強く磁着し錆が浮くことから鉄塊を内包する とみられる。
第34図	10	SI00 1	68	D	24.3	18.7	11.7	8.43	有	鉄塊系 楕円形で錆色の付着物に覆われる。中央に錆が強く浮き小さな鉄 塊が内包されているとみられる。
第34図	11	2A19	8	A1	39.5	55.0	45.7	60.65	無	炉壁 (炉内滓付) 下面上径2~6mm大の灰色粘土塊、直立する側面に径1mm大に発 泡した灰色粘土による粘壁に黒灰色滓が付着。滓部は径1~8mm 大の気孔があり一部の断面で結晶が光る。
第34図	12	2B22	4	A2	34.6	42.0	15.0	14.13	有	炉壁 (溶解) 表面は青黒色のガラス化し、筋状に流下した流動状で黒色ガラス内に 10mm大の明灰色粘土ブロックを含む。
第34図	13	3B01	2	A2	37.8	36.0	26.9	17.64	有	炉壁(溶解) 明灰色粘土が径 1mm大に発泡しながら灰緑色にガラス化し、黒色 ガラス化する過程が層状に残る炉壁片。
第34図	14	2A19	8	B1	53.2	79.8	34.0	222.9	有	「炉内滓 全面破面に囲まれ一部に錆が付着する黒灰色滓。 破面の一部上径1mm大の気孔が集中するが結晶が光る緻密質の滓。(鉄塊は含まないが、その周辺にあったものであろう)
第34図	15	2B21	1	B1	30.1	42.0	22.6	25.37	有	鉄塊系 全体に錆が強く付着土砂が多いため正確な形は不明、土砂の間に は黒色で結晶が光る滓が見える。色調と磁着することから含鉄炉 内滓とみられる。
第34図	16	2A24	2	B2	32.8	39.7	22.8	30.39	有	「炉内滓 上面は黒褐色でやや赤色を帯び細かい凹凸がある。側面は破面に 囲まれ径1mmの気孔が散る、光沢のある緻密な滓。下面は滴下す る小さなこぶ状流動面に錆色が付着。 一部に灰色粘土が付着す る。
第34図	17	2B16	2	С	61.4	59.0	52.5	202.28	無	炉内滓(粘土付) 一面に灰色発泡粘土が付着し、外周を破面に囲まれた暗灰褐色の 緻密な滓。 粘土付着面の対面は細かい凹凸に覆われ、結晶が光 る。
第34図	18	3B01	2	С	47.8	29.9	31.7	59.06	有	炉内滓(粘土付) 半円形の黒色滓で外縁に径3mm大の角礫状の灰色粘土が付着。表面はガラス質の流動面が残り内部に発泡した径5~8mm大の灰色粘土ブロックを含む。(形状と粘土の付着状態から流出孔滓の可能性あり)
第34図	19	3B11	3	E1	36.2	37.6	14.6	20.44	有	炉内滓(流動状滓) 上面は波状のゆるやかな赤色を帯びた黒褐色流動面、下面はこぶ 状にふくらむ流動面の薄い流動滓で一部に側縁部を残す. 破面 には径1mmの気孔がある。(唯一鍛冶滓の可能性あり)
第34図	20	2A19	8	D	18.6	16.5	17.9	4.85	有	鉄塊系 大豆形で付着土砂が厚いため正確な形は不明。錆が濃く浮き強く 磁着することから小さな鉄塊が内包されていたとみれれる。

第2表 製鉄関連遺物分類集計表

分類	A1	A1	A2	A2	B1	B1	B2	B2	В3	ВЗ	С	С	D	D	E1	E1	E2	E2	点数総計	重量総計
数量・重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
SI001A	38	146.42	1	1.03	26	151.25	47	562.66	2	36.18	14	894.94	4	32.11	13	63.71	1	10.82	146	1899.12
SI001B	1	1.01			1	9.72					1	53.55							3	64.28
SI004					19	243.33													19	243.33
SI005	3	15.14	3	12.09	15	165.44	1	10.98					1	63.85	1	5.12	1	1.69	25	274.31
SI006					1	2.64	2	0.6											3	3.24
SI007	11	39.42	19	83.85	44	152.12	15	126.98			1	62.61			1	13.99			91	478.97
2A18					20	54.74	32	106.48											52	161.22
2A19	11	69.76	3	11.98	24	315.27	33	175.54					1	4.85					72	577.4
2A23	4	2.27	3	4.91	6	28.75	12	49.36											25	85.29
2A24	13	17.73	22	94.95	33	110.95	2	34.67											70	258.3
2B16	1	2.03	2	8.73	5	26.8	14	217.88			3	250.49							25	505.93
2B21	1	37.72	2	11.87	5	57.87	3	26.25			1	57.39							12	191.1
2B22	3	1.73	1	14.13			1	9.35											5	25.21
3A04			1	5.84	4	13.81													5	19.65
3B01			3	46.97	5	31.8					2	63.29	2	17.2					12	159.26
3B02			5	37.63	14	63.55							1	3.58					20	104.76
3B06							1	2.78											1	2.78
3B07			3	7.29															3	7.29
3B11															1	20.44			1	20.44
3B区一括			3	25.08	5	108.75													8	133.83
合計	86	333.23	71	366.35	227	1536.79	163	1323.53	2	36.18	22	1382.27	9	121.59	16	103.26	2	12.51	598	5215.26

分類説明

A 炉壁系 1炉壁粘土:明黄~明灰色で強く被熱して発泡。

2黒色ガラス化:溶解し、黒いアメ状になったもの。

B 炉内滓系 1 含鉄系:磁着する。錆色物が付着。

2多孔質で磁着しない。

C 炉壁付着炉内滓 炉壁粘土が付着した緻密な炉内滓

D 鉄塊系滓 強く磁着し、内部に微小な鉄塊があるため、錆ぶくれやワレが生じている。

E その他 1流動状→表面に流動状の面を残すもの。

2羽口先端部: 炉内に挿入された羽口先端が溶解してガラス化。

第3表 スラグ土壌サンプル分類表

				フルイメ	ッシュとスラ	ラグ量 (g)			
サンプル名	グリット名	1 Or	mm	3n	nm	1n	nm	砂鉄	サンプル総量(g)
		磁着有	磁着無	磁着有	磁着無	磁着有	磁着無	11少 並大	
ア	2 A 18	1.58	_	13.22	4.17	3.29	_	315.34	3226.33
1	2 A 19c	8.32	_	37.43	9.35	4.12	_	163.56	2535.38
ウ	2 A 19d	_	_	0.15	0.39	1.95	_	111.16	3469.18
エ	2 A 23 b	5.66	_	5.27	2.13	2.07	0.06	130.75	2181.75
オ	2 A 24	2.33	_	20.75	5.13	13.24	_	160.05	5599.21
カ	2 A 23d	_	_	1.57	0.32	0.52	0.01	111.22	2544.24
+	2 A 24c	5.57	4.35	7.11	1.29	7.68	0.06	158.62	4753.32
ク	2 A 24d	_	_	0.84	1.08	3.75	_	215.59	4194.50
Ī	Ħ	23.46	4.35	86.34	23.86	36.62	0.13	1366.29	28503.91

※「ア」以外の砂鉄量はサンプル1kgで採取

※スラグの抽出は肉眼観察及びSUNCROWN MAGNETS No. 45を使用した。

※砂鉄の抽出はSUNCROWN MAGNETS № 45を使用した。

第3章 まとめ

今回の調査は、ごく限られた範囲ではあったが、縄文時代後期後葉~弥生時代前期の土器群、古墳時代と 平安時代の遺構群とそれに伴う須恵器や土師器、土馬など、集落の一端が明らかとなった。

縄文時代晩期末から弥生時代前期の荒海式土器の一群は、土坑 SK001 から出土した土器片を含め、明確な遺構を伴っておらず、かつ包含層のような集中的な状況ではなかったが、千葉県内でも数少ない例を追加することになった。

古墳時代・平安時代では、竪穴住居跡 7 棟と竪穴状遺構 2 棟、土坑やピットを伴う土器集中箇所 2 か所があり、調査成果の主体を占めるものとなった。古墳時代前期では SI003・SI006 の竪穴住居跡 2 棟と SD001・003・SD004 の溝 3 条が存在する。竪穴住居跡はともに断片的な遺構であった。SI006 のように居住跡とするには躊躇するような、なんら施設を持たない遺構も存在する。溝は SD003 が SD004 に接続するが、SD001と SD004 は調査区の西と東、ちょうど段丘面の縁端を画するような配置であることに注意される。SD001と 004 は掘方の断面形が同じで、SD001では北斜面に向かって徐々に深くなっていくため、通水 (排水) 施設として利用されたのかもしれない。グリッド出土遺物では有段口縁壺や東海系の底部に稜をもつ高坏などがあり、弥生時代終末から古墳時代前期に定住的な集落が出現している可能性が高い。

古墳時代後期では SI001・SI002・SI004・SI006 の竪穴住居跡と SZ001・SZ003 の遺物集中箇所が存在する。時間軸で列記すると、SZ001・003 が 6 世後半~7 世紀初頭、SI002・SI007 が 7 世紀前半、SI004 が 7 世紀中葉、SI001 A・Bが7世紀後半となり、古墳時代後期に集落が継続して営まれたことになる。竪穴を伴わない SZ001 と 003 が先に存在することが興味深い。竪穴住居跡は平面形が長方形であることも特徴的である。これも南北に長く狭い段丘面という地形に関係していたのかもしれない。

平安時代では9世紀中葉の竪穴住居跡 SI005 と 3B03・07 グリッドの土器集中箇所があり、今回の調査で最も遺物量が多い時期である。竪穴住居跡と集中箇所の土師器群は、坏・皿・椀・蓋といういわゆる供膳用の土器類を主体としていて、坏は口径13cm前後、底径8cm~7cm前後、器高4cm前後の製品が多い。皿と椀は高台が削り出し高台と呼ばれるロクロ回転を利用して底部を作りだす技法が認められる。また蓋は上総地域や下総地域をみてもこの種の器種が用いられることは稀である。もう一つの共通項は、製品の中に歪みのある器や底部や体部がひび割れた器があることである。歪みやひび割れは焼成時の温度、素地の収縮により生じたものであろうが、実用品としては違和感がある。土器集中箇所で認められた焼土の堆積を併せて考えると、おそらく一時的な使用、例えば祭祀だけに限って集落内で製作し、使用した製品群と思われる。一方、土馬はその多くが長岡京や平安京など都城の祭祀=罪や穢れを払うための大祓や祈雨祭祀に使用された祭具のひとつであるが、集落遺跡から単独あるいは土製の人形とともに出土する例があり、都城での祭祀とは異なる祭祀、神への奉献、捧げ物として使用されたとの説がある。祟り神、荒ぶる神を鎮め、地の神を捧げ奉る祭祀である。SI005の供膳用土器の一群と土馬は集落内の神奉りの儀式をおこなった証と考えておきたい。

岡町遺跡は、海岸から山稜へと至る丘陵の段丘面に立地する遺跡である。調査地は限下に蛇行する新田川とその低地を望む幅約30m~10m、長さ約80mの南北に長い段丘面の一画であり、周囲の地形から、この段丘面に集落と関連遺構群が続くことが予想される。現代では、野菜や特産のビワを栽培する耕地と宅地や寺社が並ぶ集落地となっている丘陵上にどのような古代集落が残っているか、その状況を知る術はない。山塊が背後に迫る海岸部という地理上、地形上の制約から生活域が限定されてはいるが、それぞれの時代時代で連綿と人々の生活が営まれてきたことは容易に想像できる。

第4表 土器観察表

有	日本教養	新	199 119 119		計測值 (cm) **	日本体	場を存	12	BE 27.57.14	24 - 辐射
		Ř H	4	\	成径		Ž.	77 110		O. 82
第12図1	S I 001 A	須恵器	攋	9.1	I	2.7	20%	白色粒含む。	展 (7.5 Y R 6/1)	ロクロ調整 平坦なツマミ (径 2.2cm)
第12図2	S I 001 A	須恵器	網	(92)	I	[5.6]	20%	砂粒少量含む	灰白 (10 YR 7/1)	ロクロ調整
第12図3	S I 001 A	上節器	坏	13	I	4.1	口縁部35%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	
第12図4	S I 001 A	上節器	器	(4:0)	I	[2.2]	I	砂粒やや多く含む。	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	
第12図5	S I 001 A	十二世報	器		I	[3.0]	I	砂粒含む。	灰黄褐 (10 Y R 5/2)	装飾器台か?外面:ヘラミガキ 体部に孔1か所残る
第14図1	S I 002	上	制	(11.8)	9	11.4	%02	砂粒やや多く含む。	灰褐 (5 Y R 4/2)	安房型甕
第14図2	S I 002	十二世報	影	ı	7.2	[9.2]	I	赤色スコリア含む。	橙 (5 Y R 7/6)	
第14図3	S I 002	十二年報	高坏	ı	ı	[3.4]	I	砂粒少量含む	浅黄橙 (10 YR 8/3)	外面: ヘラミガキ調整後赤彩 (10 R 5/6)
第14図4	S I 003	十二世界	幸	(14.0)	(4.0)	7.5	口縁部 25%	砂粒多量含む。	黒褐 (2.5 Y 3/1)	内外面:ミガキの痕跡 輪積痕
第14図5	S I 003	上筒器	影	(30.0)	I	[8.0]	口縁部 25%	砂粒多量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	
第14図6	S I 003	上部器	影	ı	I	[21.6]	胴部 50%	砂粒多量含む。	浅黄橙 (10 Y R 8/4)	外面:ハケ目状の調整痕その上からヘラ状工具によるナデ
第15図1	S I 004	須恵器	湘	9.6	ı	3.4	%08	砂粒少量含む。	灰 (5 Y 5/1)	ロクロ調整
第15図2	S I 004	須恵器	高坏 (坏部)	(16.0)	I	[3.5]	口縁部 20%	白色粒含む。	灰 (5 Y 6/1)	ロクロ調整
第15図3	S I 004	上節器	茶	(11.6)	ı	3.9	口縁部 10%	砂粒多量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/4)	内面:放射状に暗文 輪積痕
第15図4	S I 004	上節器	本	(13.0)	I	4.2	口縁部 10%	赤色スコリア含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	外面:輪積痕
第15図5	S I 004	十二二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	丼	(12.0)	I	[4.0]	10%	赤色スコリア含む。	浅黄橙(10 YR 8/4)	
第15図6	S I 004	十二年報	苯	(13.0)	ı	[5.4]	20%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	外面:輪積痕
第15図7	S I 004	上部器	影	(16.0)	I	[16.0]	20%	砂粒多量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	安房型斃
第15図8	S I 004	上節器	劉	(17.0)	ı	[5.5]	口縁部 10%	砂粒多量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 6/3)	安房型甕
第16図1	S I 005	上部器	丼	12.0	8.9	3.8	100%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	ロクロ調整 体部に歪み 2と重なって出土(上)
第16図2	S I 005	上師器	坏	12.7	7.2	3.5	100%	砂粒含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	ロクロ調整 1と重なって出土(下) 底部:回転糸切痕残る
第16図3	S I 005	上師器	丼	12.8	6:9	3.7	100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 3~5重なって出土(上)底部: ヒビが入る 中央に糸切痕その外間をヘラケズリ
第 16 図 4	S I 005	上師器	芹	13.2	7.4	45	100%	砂粒少量含む。	機 (5 YR 7/6)	ロクロ調整 3~5重なって出土(中)灯明皿に使用か? 外面:複熱により器面流れ 口縁に煤付着 歪み有 底部: 中央に糸切痕その外間をヘラケズリ
第16図5	S I 005	上節器	本	12.4	7.3	4.7	100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 3~5重なって出土(下)底部にヒビが入る
第16図6	S I 005	十一年報	片	12.4	7.0	3.5	100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 7と重なって出土(上) 底部:回転糸切痕その 外間をヘラナデ
第16図7	S I 005	上節器	丼	12.6	7.4	4.1	100%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 6と重なって出土(下) 底部:回転糸切痕その 外間をヘラケズリ
第16図8	S I 005	上部器	苯	12.4	7.9	4.6	%08	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/3)	ロクロ調整 底部:ヘラケズリ
第16図9	S I 005	上節器	坏	12.6	7.5	4.3	%06	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/4)	ロクロ調整
第16図10	S I 005	工師器	坏	12.8	7.2	4.1	100%	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 YR 6/3)	ロクロ調整
第16図11	S I 005	上	坏	(13.0)	7.7	3.9	%02	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 YR 7/3)	ロクロ調整 底部:回転糸切痕その外間をヘラナデ
第16図12	S I 005	上師器	坏	12.6	7.0	4.2	%02	赤色スコリア含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後その外周をヘラケズリ
第16図13	S I 005	上	坏	(12.0)	(7.0)	3.5	30%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	ロクロ調整 底部:糸切後その外周をヘラケズリ
第16図14	S I 005	计算器	丼	13.0	7.4	4.1	100%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	ロクロ調整
第16図15	S I 005	上節器	丼	12.6	7.6	4.1	%08	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後ヘラケズリ
第18図16	S I 005	上部器	丼	12.9	7.1	4.1	%08	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	ロクロ調整
第18図17	S I 005	十二二二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	茶	(12.4)	7.0	3.8	20%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後その外周をヘラナデ

					計測值 (cm)					
挿図番号	遺構番号	種類	器種	<u></u>	は推定、[] は到	」は現存値	遺存度	胎土	外面色鯛	a %
				口径	底径	超點				
第18図18	S I 005	十一部器	丼	(12.4)	7.0	3.7	40%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/8)	ロクロ調整 底部:回転糸切痕
第18図19	S I 005	上部器	丼	13.0	7.5	4.2	100%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後その外間をヘラケズリ
第 18 図 20	S I 005	上節器	丼	12.6	7.2	3.9	%09	$1 \sim 3mm$ 大のスコリア粒含む。	む。 橙 (5 Y R 7/8)	ロクロ調整 底部:糸切後その外間をヘラケズリ
第 18 図 21	S I 005	十二世報	本	12.8	7.2	3.8	20%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部及び周縁ヘラケズリ
第 18 図 22	S I 005	十二世界	茶	12.6	7.0	3.8	20%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (5 Y R 7/3)	ロクロ調整 全体に歪む 内外面に媒付着 底部:ヘラケズリ
第 18 図 23	S I 005	十二世報	关	12.9	7.0	3.9	100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 内面:底部に煤
第 18 図 24	S I 005	十二年報	丼	13.3	8.0	4.2	85%	黒色粒含む。	橙 (5 Y R 7/8)	ロクロ調整 口縁に歪み
第 18 図 25	S I 005	十二二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	茶	13.0	7.7	3.9	80%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (75 Y R 7/4)	ロクロ調整 底部:回転糸切痕その外周をヘラケズリ
第 18 図 26	S I 005	上部器	本	12.8	7.2	3.5	%06	白色針状物質含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後ヘラケズリ
第 18 図 27	S I 005	上部器	本	12.8	7.8	3.9	%86	赤色スコリア含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 28	S I 005	十一部器	丼	12.4	7.0	3.5	100%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	ロクロ調整 内面:煤付着
第 18 図 29	S I 005	十二世報	本	12.2	7.6	3.8	%86	2mm 程の灰白色粒含む。	灰黄褐 (10 Y R 6/2)	ロクロ調整 底部:回転ヘラケズリ
第 18 図 30	S I 005	干飾器	坏	12.6	7.8	3.8	%08	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/8)	ロクロ調整 口縁部に煤付着
第 18 図 31	S I 005	十年	丼	12.3	8.9	3.9	95%	砂粒少量含む。	黄灰 (2.5 Y 5/1)	ロクロ調整 全体に歪む 底部:回転糸切痕その外周をヘラ ケズリ
第 18 図 32	S I 005	上部器	丼	(12.6)	(7.0)	3.5	20%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (5 Y R 7/4)	ロクロ調整 底部:糸切後ヘラナデ
第 18 図 33	S I 005	上部器	本	(12.4)	7.0	3.5	%02	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 34	S I 005	十一部器	丼	11.5	4.7	4.0	%06	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 35	S I 005	干節器	坏	Ι	9.9	1	40%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部及び周縁ヘラケズリ
第 18 図 36	S I 005	上節器	坏	13.0	7.0	3.7	80%	白色針状物質含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 底部:回転糸切痕
第 18 図 37	S I 005	上前器	坏	13.2	8.0	4.0	80%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 内外面に油煙付着
第18図38	S I 005	十二年報	坏	12.9	7.5	3.5	100%	白色針状物質含む。	灰黄褐 (10 YR 6/2)	ロクロ調整 40と重なって出土(上)
第 18 図 39	S I 005	上會器	林	13.2	7.0	3.7	%02	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:糸切後ヘラケズリ
第18図40	S I 005	上	坏	12.8	7.7	3.7	100%	白色粒微量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 38と重なって出土(下)
第 18 図 41	S I 005	上節器	坏	12.7	7.8	3.4	100%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 42	S I 005	計量器	本	13.8	7.2	3.9	100%	砂粒含む。	にぶい褐 (7.5 Y R 5/4)	ロクロ調整 底部及び周縁ヘラケズリ
第 18 図 43	S I 005	上會器	林	14.6	7.6	4.0	100%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第18図44	S I 005	上部器	本	(14.0)	(0.0)	3.5	20%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 Y R 7/4)	ロクロ調整 底部及び周縁ヘラケズリ
第 18 図 45	S I 005	十章器	林	(13.0)	(8.0)	3.4	25%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:ヘラケズリ
第18図46	S I 005	上節器	坏	(15.6)	7.0	4.4	%09	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 外面:底部から胴部中央まで回転ヘラケズリ
第 18 図 47	S I 005	十章器	本	(15.4)	7.0	5.1	%02	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 6/6)	ロクロ調整 外面:底部から胴部中央まで回転ヘラケズリ
第18図48	S I 005	上	坏	(16.2)	(7.0)	5.4	20%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 49	S I 005	十二二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	本	(14.0)	(6.0)	4.0	25%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	ロクロ調整 外面:底部から胴部中央まで回転ヘラケズリ
第 18 図 50	S I 005	十一部器	丼	15.4	6.2	4.8	%06	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 18 図 51	S I 005	上節器	坏	16.2	6.5	5.5	%02	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/8)	ロクロ調整
第 18 図 52	S I 005	上師器	井	14.6	6.3	4.1	%06	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 全体に歪む 外面:ロクロ成形後回転ヘラケズ リ調整 内面:ヘラミガキ
第19図53	S I 005	十二	高合付皿	(18:0)	9.0	2.7	20%	石英粒?含む。	橙 (2.5 Y R 6/6)	ロクロ調整 底部内面:重ね焼き痕
第19図54	S I 005	十二年報	高台付皿	16.2	9.2	3.0	100%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	ロクロ調整
第19図55	S I 005	上商器	高台付皿	17.8	8.0	3.3	%02	赤色スコリア少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 全体に歪む 内面:ヘラミガキ? 底部:回転 ヘラケズリ
			_							

					() #P III THE					
相图录品	非	桶箱	器] -	计相左值	排左座	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	外面布劃	新
E E E	C H (H-S)	H A	HLL. H	一一	」 海	器高	X Z	7117	Med (2) 1814 /	C. D.I.
第 19 図 56	S I 005	上		16.0	7.0	3.3	100%	砂粒·赤褐色粒·白色針状物質 含む。	にぶい橙 (7.5 YR7/4)	ロクロ調整
第19図57	S I 005	上師器	III	(14.4)	(8.0)	2.8	20%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:ヘラケズリ
第 19 図 58	S I 005	上師器	湘间	18.6	I	3.8	%08	赤色スコリア含む。	橙 (25 Y R 7/8)	ロクロ調整 平坦なツマミ (径 4.1cm) 外面: 回転ヘラケズリ 内面: ヘラミガキ
第 19 図 59	S I 005	岩量	攋	19.0	I	5.0	100%	砂粒・赤褐色粒含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 全体に歪む 平坦なツマミ(径45cm) 内面: ヘラミガキ
第 19 図 60	S I 005	出	搁	17.0	I	3.4	70%	砂粒少量含む。	橙 (25 Y R 7/6)	ロクロ調整 全体に歪む 平坦なツマミ (径4.1cm) 内面: ヘラミガキ
第 19 図 61	S I 005	上師器	緣	(26.0)	(9:6)	14.5	20%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 6/6)	内面:ヘラミガキ調整後に黒色処理
第 19 図 62	S I 005	上師器	施	20.4	I	[9:2]	口縁~胴部 20%	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/4)	内面:ヘラミガキ調整後に黒色処理
第 19 図 63	S I 005	上師器	台付甕	14.2	I	[8.0]	口縁部 50%	砂粒多量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	
第 19 図 64	S I 005	上師器	台付甕	(12.2)	9.7	14.7	80%	砂粒少量含む。	灰褐 (7.5 Y R 5/2)	
第 19 図 65	S I 005	上師器	台付甕	ı	8.4	[11.9]	%09	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/4)	外面:輪積痕残る
第 19 図 66	S I 005	上師器	台付幾	I	9.6	[2.5]	脚部 100%	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (7.5 YR 7/4)	
第 19 図 67	S I 005	上節器	飯	ı	11.0	[16.8]	20%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	
第 19 図 68	S I 005	上師器	瓶	Ι	I	[151]	1	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	
第 19 図 69	S I 005	上師器	飯	ı	ı	[11.4]		砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	
第19図70	S I 005	上節器	小型壺か甕?	I	4.0	[1.8]	底部 100%	砂粒・白色針状物質含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	
第19図71	S I 005	上節器	脚;	I	(37.2)	[4.1]	ı	砂粒含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 6/4)	
第19図72	S I 005	須恵器	倒	ı	I	[16.5]	20%		オリーブ黒 (5 Y 3/1)	自然降灰 ロクロ調整
第21図1	S I 006	上節器	副坏	I	I	[3.0]	ı	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 6/6)	外面:縦方向のヘラミガキ 赤彩
第21図2	S I 006	上師器	直坏	ı	ı	[2.7]	I		浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	外面:赤彩
第21図3	S I 007	上節器	丼	(14.0)	ı	[4.0]	25%	赤色スコリア少量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/4)	器面磨滅
第21図4	S I 007	上師器	坏?	ı	8.0	[2.5]	底部 50%	砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 YR 7/3)	
第21図5	S I 007	上節器	影	(22.4)	I	[2:3]	口縁部 25%	色スコリア含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	
第21図6	S I 007	須恵器	小型壺	ı	I	[2.7]	I	砂粒少量含む。	褐灰 (10 Y R 6/1)	ロクロ調整
第22図1	S Z 001	須恵器	共	12.5	I	4.3	100%	白色粒・小石含む。	青灰 (10 B G 6/1)	ロクロ調整
第22図2	S Z 001	上師器	丼	12.0	I	4.3	%06	砂粒含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 7/4)	内外面:赤彩 外面:ハケ調整の後にヘラケズリ
第22図3	S Z 001	上師器	共	14.6	I	5.0	100%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	器面磨滅
第22図4	S Z 001	十二年報	坏	11.3	I	9:9	100%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/6)	
第22図5	S Z 001	上師器	緣	17.8	7.0	8.3	100%	赤色スコリア少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	内外面:赤彩 (2.5 YR 5/6)
第22図6上	S Z 001	上節器	影	15.0	I	[6.5]	口縁部 25%		にぶい黄橙 (10 Y R 7/3)	安房型甕
第22図6下	S Z 001	上節器	崇	ı	9.0	[52.9]	底部 100%	砂粒多量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 6/4)	安房型甕 内外面:輪積痕残る
第22図7	S Z 001	上節器	小型灣	(13.4)	I	10.6	%08	砂粒多量含む。	にぶい橙 (5 Y R 7/4)	安房型甕
第22図8	S Z 001	上曹器	觝	23.4	6.8 (内径 6.2cm)	22.0	%06	砂粒多量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	内面:下部に輪積痕残る
第23図1	S Z 003	須恵器	坏	13.0	I	3.6	%06	白色粒多量含む。	灰 (7.5 Y R 6/1)	ロクロ調整
第23図2	S Z 003	須恵器	苯	(11.6)	I	[3.8]	40%	白色粒多量含む。	展 (5 Y R 6/1)	ロクロ調整
第23図3	S Z 003	上師器	本	12.6	ı	4.0	%06	砂粒少量含む。	灰褐 (7.5 Y R 6/2)	
第 23 図 4	S Z 003	上事器	太	(12.0)	ı	3.2	40%	砂粒・石英粒含む。	橙 (7.5 Y R 6/6)	外面:口縁部に媒付着

特区計与 連轉番号 種類 評価 口径 第23 図5 S Z 003 土師器 整 (220) 第23 図5 S Z 003 土師器 整 (180) 第23 図5 S D 004 土師器 海外 (90) 第23 図5 S D 004 土師器 海外 (90) 第29 図5 S D 004 土師器 海外 (90) 第29 図5 S D 004 土師器 海外 (90) 第30 図5 3 B 02 土師器 海外 (90) 第30 図5 3 B 02 土師器 海外 (90) 第30 図5 3 B 06 土師器 海外 (90) 第30 図6 3 B 06 土師器 海外 (40) 第30 図1 2 A 24 土師器 海外 (40) 第30 図1 2 B 22 土師器 海	() (4推定、[] (4現存作 14現存作 1434存作 1434存作 1434存作 1430	聯聯 (60] (60] (145] (145] (55 (29] (29] (29] (20] (46]	選存度 四線~胴部 20% 口線部 25% 30% 40% 25% ————————————————————————————————————	胎士 粒 赤色スコリア含む。 粒多量含む。 	外面色調	an 表
S Z 003 土師器				赤色スコリア含む。 多量含む。 boom + かんごを/ 今れ		中面:里布加油
S Z 003 土師器 終 S Z 003 土師器 幾 S Z 003 土師器 幾 S Z 002 土師器 幾か。強 S D 004 土師器 成水 S A 09 土師器 成水 S B 02 土師器 成水 S B 03 土師器 成水 S B 04 土師器 成 S B 11 須成器 水 S B 22 土師器 水 S B 22 土師器 水 S B 23 土師器 水 S B 24 土師器 水 S B 25 土師器 水 S B 25 土師器 水 S B 26 土師器 水 S A 10 土師器 水 S A 15 土師器 水				赤色スコリア含む。 多量含む。 		内语·里在紅猫
S Z 003 土師器 幾 S Z 003 土師器 幾 S Z 002 土師器 幾 S D 001 土師器 減 S D 004 土師器 成 3 A 09 土師器 成 3 B 02 土師器 成 3 B 02 土師器 成 3 B 02 土師器 成 3 B 05 土師器 成 3 B 06 土師器 成 3 B 06 土師器 成 3 B 07 紅礁器 城 3 B 07 紅礁器 城 3 B 11 紅礁器 球 3 B 12 土師器 球 3 A 10 土師器 球 3 A 15 土師器 球 3 B 15 土師器 球 3 A 15 <td></td> <td>[60] [145] [165] [92] 55 55 [29] [35] — — [70] [46] [120]</td> <td></td> <td> 粒多量含む。 - 2 +のホロダノやす。</td> <td>にぶい黄橙(10 Y R 6/3)</td> <td>サンコー・ヨロー・サンコー・コニー・サンコー・コニー・カンコー・コニー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコ</td>		[60] [145] [165] [92] 55 55 [29] [35] — — [70] [46] [120]		粒多量含む。 - 2 +のホロダノやす。	にぶい黄橙(10 Y R 6/3)	サンコー・ヨロー・サンコー・コニー・サンコー・コニー・カンコー・コニー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコー・カンコ
SZ 003 土師器 選 SZ 002 土師器 業 SD 001 土師器 鉄 SD 004 土師器 放水 SD 004 土師器 放水 SD 004 土師器 放水 3A 09 土師器 放水 3B 02 土師器 放水 3B 02 土師器 放水 3B 02 土師器 放水 3B 02 土師器 放水 3B 03 土師器 放水 3B 06 土師器 放水 3B 06 土師器 放水 3B 07 須健器 放水 3B 11 須健器 水 3B 11 須健器 水 2A 24 土師器 水 3B 11 須健器 水 2B 22 土師器 水 3B 34 15 土師器		[145] [165] [165] [92] [55] [29] [35] [- 9mm 十八小工名/今末	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	
S Z 003 土師器 幾 S D 001 土師器 幾 S D 004 土師器 競小強 S D 004 土師器 成 S D 004 土師器 成 3 A 09 土師器 成 3 B 02 土師器 成 3 B 06 土師器 成 3 B 06 土師器 成 3 B 07 有 有 3 B 11 有 成 3 B 12 土 上 3 B 13 大 大 3 B 14 大 大 3 B 15 土 大 3 B 16 上 大 5 A 24 上 上 大 5 B 22 上 上 大 5 A 20 上 上 大 5 A 20 上 上 大 5 A 20 上 上		[16.5] [9.2] [5.5] [2.9] [3.5] [30% 40% 25% — — — — — — — — — — — — — — — — — — —		浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	器面磨滅
S Z 002 上師器 業 S D 001 上師器 海水 S D 004 上師器 遊水 S D 004 上師器 遊水 3 A 09 上師器 商水 3 B 02 上師器 商水 3 B 06 上師器 遊水 3 B 06 上師器 政 3 B 07 上師器 政 3 B 07 上師器 政 3 B 03 上師器 水 3 A 10 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 03 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 03 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 03 上師器 水 3 A 1		[92] 55 55 [29] (35) [70] [46] [120]	40% 25% — — — — — — — — — — — — — — — — — — —	砂粒少量含む。	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	
SD 001 土師器 終 SD 004 土師器 遊水壺 3 A 09 土師器 遊水壺 3 A 09 土師器 海水壺 3 B 02 土師器 海水 3 B 03 土師器 海水 3 B 06 土師器 海 3 B 07 須穂器 城 3 B 07 紅地路 城 3 B 08 土師器 球 3 B 07 土師器 球 3 B 03 土師器 球 2 A 20 土師器 球 2 B 22 土師器 球 3 A 10 土師器 球 3 A 15 土師器 球 3 A 15 土師器 球 3 A 15 土師器 球 3 B 03 土師器 球 3 A 15 土師器 球 3 A 15		5.5 [2.9] [3.5] — — [7.0] [4.6] [12.0]	25% — — — — — — — — — — — — — — — — — — —	砂粒少量含む。	黒褐(2.5 Y R 3/1)	
SD 004 土師器 郊水電 3 A 09 土師器 遊水電 3 A -指 土師器 商水 2 B 22 土師器 商水 3 B 02 土師器 商水 3 B 11 土師器 商水 3 B 02 土師器 商水 3 B 02 土師器 商水 3 B 02 土師器 商水 3 B 05 土師器 商水 3 B 06 土師器 商 3 B 07 須速器 旅 3 B 11 須速器 水 3 B 22 土師器 水 2 B 22 土師器 水 3 A 10 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 B 03 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 B 03 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 A 15 土師器 水 3 B 03		[29] [3.5] - [7.0] [46] [120]	一	砂粒やや多く含む。	赤 (10 R 5/6)	外面:縦方向のヘラミガキ 赤彩
SD 004 土師器 幾少壺 3 A 09 土師器 商 2 B 22 土師器 商 3 B 02 土師器 競令 3 B 06 土師器 競令 3 B 06 土師器 所 3 B 07 須速器 所 3 B 07 須重器 所 3 B 11 須重器 所 3 B 12 土師器 所 2 A 20 土師器 所 3 A 10 土師器 所 3 A 15 土師器 所 3 A 15 土師器 所 3 B 03 土師器 所 3 A 15 土師器 所 3 A 15 土師器 所 3 B 03 土師器 所 3 A 15 土師器 所 3 A 15		[3.5] - [7.0] [46] [12.0]	底部 25%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	内外面:赤彩
3 A 09 土師器 遊 3 A 一括 土師器 所外 3 B 02 土師器 商外 3 B 11 土師器 商外 3 B 02 土師器 商外 3 B 02 土師器 協介 3 B 02 土師器 競合 3 B 06 土師器 競合 3 B 06 土師器 所久 3 B 11 須遠器 所久 3 B 12 土師器 所久 3 B 13 須遠器 所久 3 B 14 須遠器 所久 3 B 15 紅鹿器 所久 5 A 20 土師器 所久 5 A 15 土師器 所久 3 A 15 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td>砂粒少量含む。</td><td>にぶい黄橙 (10 Y R 6/4)</td><td></td></t<>				砂粒少量含む。	にぶい黄橙 (10 Y R 6/4)	
3 A 一括 土師器 小型壺 2 B 22 土師器 商环 3 B 02 土師器 商环 3 B 11 土師器 商环 3 B 02 土師器 路台 3 B 02 土師器 路台 3 B 02 土師器 路台 3 B 06 土師器 路台 3 B 06 土師器 所久(財務) 2 A 24 土師器 所久(大路) 3 B 11 須建器 所久 3 B 12 土師器 所久 2 A 20 土師器 所久 3 B 03 土師器 所久 2 A 20 土師器 所久 3 A 10 土師器 所久 3 A 15 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名 3 A 15 土師器 所名 3 B 03 土師器 所名		[7.0] [4.6] [12.0] [6.1]	ı	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	外面:赤彩 浮文
2 B 22 土師器 商环 3 B 02 土師器 商环 3 B 11 土師器 商环 3 A 05 土師器 器台 3 B 06 土師器 競子 3 B 06 土師器 競子 3 B 11 須遠器 环 3 B 11 須遠器 环 3 B 12 五師器 环 3 B 13 須遠器 环 3 B 14 須遠器 环 2 A 24 土師器 环 3 B 13 須遠器 环 2 A 29 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 A 20 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环		[7.0] [46] [12.0] [6.1]	ı	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	櫛書き文が見られる
3 B 02 土崎器 高环 3 B 11 土崎器 高环 3 A 05 土崎器 端子 3 B 06 土崎器 織子 3 B 06 土崎器 織子 3 B 06 土崎器 織子 3 B 11 須遠器 珠 3 B 11 須遠器 珠 3 B 12 須遠器 珠 3 B 13 須遠器 珠 3 B 14 須遠器 珠 3 B 15 土崎器 珠 2 A 20 土崎器 珠 2 A 20 土崎器 珠 3 A 10 土崎器 珠 3 A 15 土崎器 珠 3 A 15 土崎器 珠 3 A 15 土崎器 珠 3 B 03 土崎器 珠 3 A 15 土崎器 珠 3 B 03 土崎器 珠		[4.6]	口縁部10%	砂粒少量含む。	赤 (10 R 5/6)	内外面:ヘラミガキの後に赤彩
3 B 11 土師器 高环 3 A 05 土師器 第令 3 B 06 土師器 蓋? 3 B 06 土師器 整合 3 B 11 須遠器 珠 3 B 12 五師器 珠 2 A 20 土師器 珠 3 A 10 土師器 珠 3 A 10 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 B 03 土師器 珠 3 B 03 土師器 珠		[120]	ı	砂粒少量含む。	赤 (10 R 5/6)	内外面:ヘラミガキの後に赤彩
3 B 02 上師器 商外 3 A 05 上師器 盤 台 3 B 06 上師器 盤 2 3 B 06 上師器 競力 2 A 24 上師器 縣台 3 B 11 須遠器 城 3 B 2 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 03 上師器 水 3 B 03 上師器 水		[6.1]	口縁部 5%	砂粒少量含む。	灰白 (10 Y R 8/2)	内面:ヘラミガキの後に赤彩
3 A 05 上師器 器台 3B 06 上師器 競? 3 B 06 上師器 競令 2 A 24 上師器 路台 3 B 11 須恵器 塔台 3 B 11 須恵器 珠 3 B 07 須恵器 珠 3 B 12 土師器 珠 2 A 20 土師器 珠 2 A 20 土師器 珠 3 A 10 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 B 03 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 B 03 土師器 珠 3 A 15 土師器 珠 3 B 03 土師器 珠			30%	砂粒多量含む。	橙(7.5 Y R 7/6)	内外面:ヘラミガキの後に赤彩 脚部内面:樒付近に横方向 のハケ目が入る
3B — 括 上師器 競 ? 3B 06 上師器 競 ? 2 A 24 上師器 婦女 3 B 11 須遠器 麻 2 B 22 上師器 床 2 B 22 上師器 床 3 B 03 上師器 床 3 A 10 上師器 床 3 A 15 上師器 床 3 B 03 上師器 床 3 B 03 上師器 床	(13.0)	[7.0]	35%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	羽口に転用か?脚部内面:ハケ目 穿孔 1カ所残る(直径 1.0cm)
3 B 06 土師器 遊 3 B 06 土師器 協好(脚路) 2 A 24 土師器 婦 3 B 11 須速器 施 3 B 11 須速器 施 2 B 22 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 A 20 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环	1	[3.5]	ı	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/4)	ツマミ? 径 3.0cm
3 B 06 土師器 高坏 (興務) 2 A 24 土師器 発台 3 B 11 須恵器 环 3 B 12 須恵器 所 2 B 22 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 B 22 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 23 土師器 环 3 B 3 B 03 土師器 环	1	[3.2]	1	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	内外面:赤彩
2 A 24 上師器 器台 3 B 11 須恵器 塔 3 B 12 須恵器 核 2 B 22 上師器 坏 2 A 20 上師器 坏 2 A 20 上師器 坏 2 A 20 上師器 坏 3 A 10 上師器 坏 3 A 15 上師器 坏 3 A 15 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 23 上師器 水 3 A 15 上師器 水 3 B 3 B 03 上師器 水	(13.0)	[5.1]	I	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	脚部穿孔 1 か所残る(径 0.5cm)
3 B 11 須茂器	- (0.8)	[4.8]	40%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 6/8)	内面:赤彩 底部中央穿孔(径1.5cm) 脚部穿孔1か所残る(復元径1.0cm)
3 B 07 須茂器 施 3 B 11 須茂器 商 2 B 22 土師器 环 3 B 03 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 B 22 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环	8.3 5.0	2.7	100%	砂粒少量含む。	灰白 (2.5 Y 8/2)	ロクロ調整
3B11 須速器 高坏 (坏路) 2B22 土師器 环 3B03 土師器 环 2A20 土師器 环 2B22 土師器 环 3A10 土師器 环 3A15 土師器 环 3A15 土師器 环 3B03 土師器 环	10.0	4.0	30%	白色粒やや多く含む。	灰(N4/)	ロクロ調整 底部:回転ヘラケズリ ケズリ出し高台
2 B 22 土師器 环 3 B 03 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 B 22 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环		[4.0]	口縁部 20%	砂粒少量含む。	灰 白 (2.5 Y 8/1)	ロクロ調整
3 B 03 土師器 环 2 A 20 土師器 环 2 B 22 土師器 环 3 A 10 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 A 15 土師器 环 3 B 03 土師器 环	- (0.11	[3.5]	%07	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	
2 A 20 土崎器 环 2 B 22 土崎器 环 3 A 10 土崎器 环 3 A 15 土崎器 环 3 A 15 土崎器 环 3 B 15 土崎器 环 3 A 15 土崎器 环	- 0.01	3.4	95%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 6/6)	全体に歪む
2B22 土崎器 环 3A10 土崎器 环 3A15 土崎器 环 3A15 土崎器 环 3B3A15 土崎器 环 3B03 土崎器 环	- 9:61	5.5	%26	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 6/8)	全体に歪み 内外面:赤彩
3 A 10 土師器 坏 3 A 15 土師器 坏 3 A 15 土師器 坏 3 A 15 土師器 坏 3 B 03 土師器 坏	13.0)	4.9	40%	砂粒・赤色スコリア少量含む。	にぶい橙 (5 Y R 6/4)	内面:放射状に暗文が入る
3A15 土師器 坏 3A15 土師器 坏 3A15 土師器 坏		4.3	%09	砂粒多量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 底部:糸切痕わずかに残る
3 A 15 土崎器 环 3 A 15 土崎器 环 3 B 03 土崎器 环	12.0 7.4	3.4	20%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整
3 A 15 上簡器 坏 3 B 03 上簡器 坏	13.4) 8.0	3.7	口縁部 25%	砂粒少量含む。	にぶい橙 (7.5 YR7/4)	ロクロ調整
3 B 03 十管路	(7.0)	4.9	30%	砂粒多量含む。	にぶい橙 (5 YR 6/4)	ロクロ調整 外面:底部から胴部中央まで回転ヘラケズリ
	13.0 7.0	4.0	%86	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	ロクロ調整
第30 図 24 3 B 03 土師器 坏 128	12.8	4.0	100%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整
3 B 0 3 上 上 節 器		4.2	100%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第30図26 3 B 03 上師器 坏 (120)	12.0) 7.0	3.4	20%	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整
3 B 0 3 上師器 坏		3.7	20%	状物質少量含む。		
第30図28 3 B 03 上師器 坏 13.4	13.4 7.8	3.8	%66	砂粒少量含む。	橙 (5 Y R 7/6)	ロクロ調整 全体に歪む 焼成時に大きくヒビが入る
第30図29 3B03 土師器 坏 128	7.0	3.5	100%	砂粒少量含む。	橙(7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整 底部:回転糸切痕その外周をヘラケズリ 体部 焼成時に大きくヒビが入る

					計測値 (cm)					
挿図番号	遺構番号	種類	器種	7 ()) は推定、[] は現存	現存值	遺存度	胎土	外面色調	垂赤
				口径	底径	超電				
第30図30	3 B 03	上節器	本	13.0	7.0	4.0	%66	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 全体に歪む 体部焼成時に大きくヒビが入る
第30図31	3 B 03	上師器	丼	13.2	7.4	4.1	100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 YR 6/6)	ロクロ調整 全体に歪む 体部焼成時に大きくヒビが入る
第30図32	3 B 07	上節器	本	12.4	8:9	3.5	%06	砂粒少量含む。	橙 (2.5 YR 7/6)	ロクロ調整
第30図33	3 B 07	上節器	茶	(12.0)	6.5	3.5	25%	1 ~ 2mm 白色粒	橙 (2.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第30図34	3 B 07	上節器	女	(14.0)	6.5	4.2	40%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第30図35	3 B 07	上節器	茶	(13.6)	(9.7)	4.0	20%	砂粒少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/6)	ロクロ調整
第30図36	3 B 07	上節器	女	12.8	9.7	3.6	20%	砂粒・赤色スコリア少量含む。	浅黄橙 (7.5 YR 8/4)	ロクロ調整 内外面:口縁部にスス付着
第30図37	3 B 07	上節器	茶	12.6	I	[3.3]	口縁部 40%	白色粒含む。	橙 (7.5 Y R 7/6)	ロクロ調整
第 30 図 38	3 A 15	上師器	夠	(20:0)	(10.0)	6.0	30%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 6/8)	ロクロ調整 底部回転ヘラケズリ 削り出し高台 内面:見 込に重ね焼痕
第30図39	3 B 07	上師器	椀	18.0	7.8	6.0	%08	砂粒少量含む。	橙 (2.5 YR 6/6)	ロクロ調整 内面:ミガキ 底部:回転ヘラケズリ
第30図40	3 B 07	上節器	Ш	15.2	7.0	2.9	底部 100%	砂粒少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整
第30図41	3 B 07	干飾器	Ш	15.6	7.0	3.7	%26	黄橙色の粘土粒含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	ロクロ調整 大きく歪む
第30図42	3 A 15	上節器	網	(18.4)	I	3.2	40%	砂粒・赤色スコリア少量含む。	橙 (2.5 Y R 7/8)	外面:回転ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ
第30図43	3 B 03	上師器	糊	_	(19.0)	[3.2]	20%	砂粒少量含む。	橙 (7.5 YR 7/6)	ロクロ調整 ツマミ部分欠損
第30図44	3 B 03	上節器	蓋 (ツマミ)	1	-	[1.7]	ツマミ 100%	砂粒少量含む。	灰黄褐 (10 YR 6/2)	
第31図45	3 B 07	干飾器	罴	15.9	I	[14.5]	%09	白色粒含む。	黒褐 (7.5 Y R 3/1)	
第31図46	3 B 11	上節器	劉	(22.0)	I	[14.5]	□縁部25%	白色粒多量含む。	にぶい褐 (7.5 Y R 5/3)	
第31図47	3 B 11	上節器	嶽	(22.0)	I	[11.8]	口緣部30%	砂粒やや多く含む。	橙 (5 Y R 7/6)	
第31 図 48	2 A 24	上節器	紫	(22.0)	I	[19.0]	20%	2mm 程の小石多く含む。	浅黄橙 (7.5 Y R 8/4)	器面磨滅 安房型斃
第31図49	3 A 05	干師器	꽖	(18.0)	I	[7.5]	口縁部 20%	砂粒多量含む。	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	
第31図50	3 B 07	上節器	嶽	10.9	5.4	10.0	%08	砂粒やや多く含む。	橙(2.5 YR 7/8)	
第31図51	3 B 07	須恵器	長頸壺	12.0	I	[6.3]	30%	5mm 大小石含む。	展 (10 Y 6/1)	ロクロ調整

小笠原好彦「土馬考」「物質文化」25物質文化研究会 1975

水野正好「馬・馬・馬ーその語りの考古学」「文化財学報」第2集奈良大学文化財学科 1983

大原正義・川島利道 [富津市岩坂大台遺跡] 財団法人千葉県文化財センター 1983

今泉潔・小林清隆・山口典子ほか『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』財団法人千葉県文化財センター 1987 豊巻幸正・笹生衛『千葉県袖ケ浦町永吉台遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター

房総歴史考古学研究会 [房総における歴史時代土器の研究』 1987

1990 大川周三・長谷川厚 [草山遺跡 三] 神奈川県立埋蔵文化財調査センター

野中徹‧杉山春信‧杉山奈津子‧高梨俊夫「千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書」鴨川市遺跡調査会・鴫川市教育委員会 2000 笹生衛 [第6章古代の信仰] [房総考古学ライブラリー歴史時代1] 財団法人千葉県文化財センター 1993

東海土器研究会 [須恵器生産の出現から消滅] 2000

2009 加藤夏姫[土馬を中心とした古代祭祀の多様性の研究 - 静岡県を中心として - 」「國學院大學考古学資料館紀要』第25輯國學院大學考古資料館

白井久美子・小林信一「館山市萱野遺跡・字土台遺跡」財団法人千葉県教育振興財団 2010

小林清隆 [館山市萱野遺跡 (3) 』財団法人千葉県教育振興財団 2012

後藤建一 [遠江湖西窯跡群の研究』 2015

白鳥章・山口典子・小林昴博ほか [柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書11] 公益財団法人千葉県教育振興財団 2017

写 真 図 版





遺跡遠景(北東から)



遺跡調査後全景(南西から)



SI001A遺物出土状況 (南から)



SI002カマド内遺物出土状況(南西から)



SI002・003 (南から)



SI005遺物出土状況(南から)



SI001A·B、SK001 (西から)



SI003遺物出土状況(西から)



SI004 (東から)



SI005遺物出土状況・北東隅(南西から)

図版 4



SI005遺物出土状況・北西隅(南から)



SI005土馬出土状況 (東から)



SI006(手前)・007(奥)(北から)



SZ001遺物出土状況(東上から)



SI005遺物出土状況・北側(北西から)



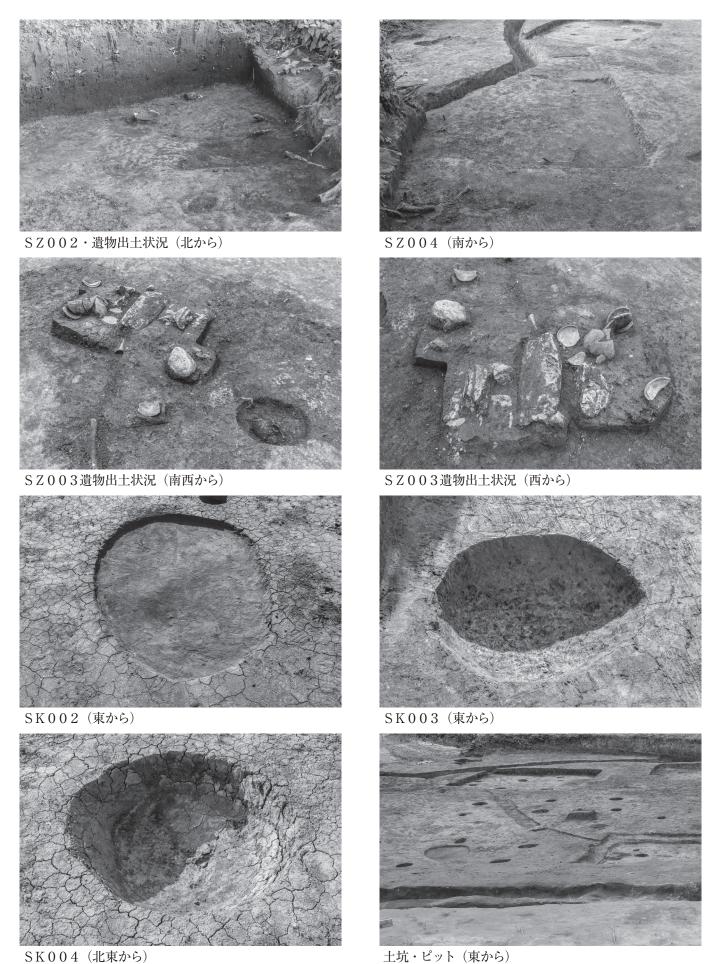
SI005 (南から)



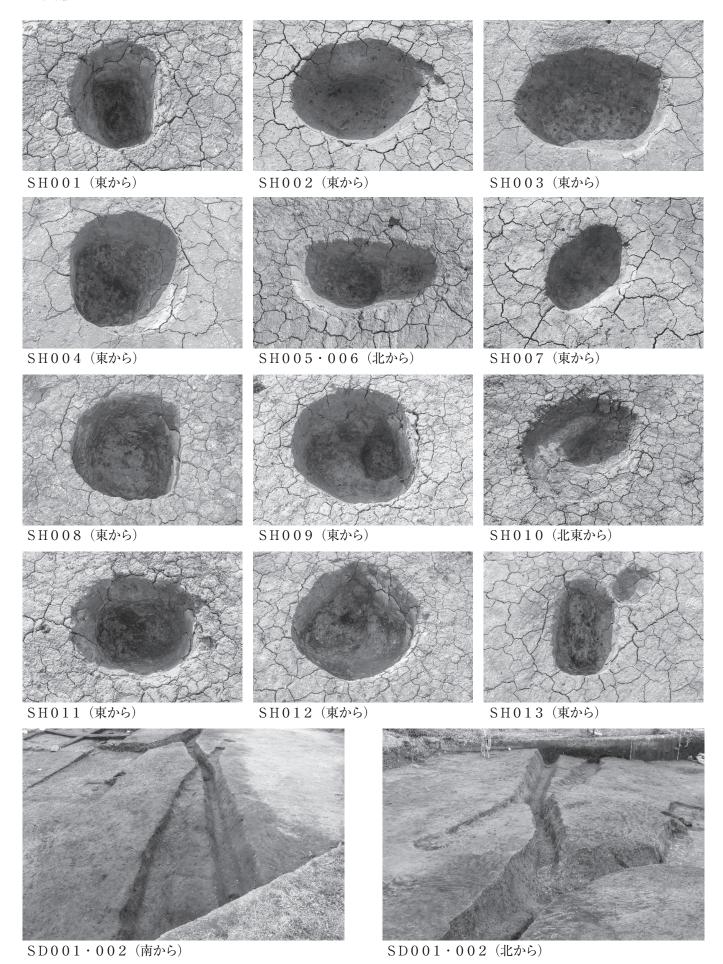
SI007カマド (西から)



SZ001遺物出土状況(北から)



図版 6





SD001・003 (南西から)



SD004 (南から)



3B03グリッド遺物出土状況(南西から)



2A23グリッドスラグ等出土状況 (東から)



SD001・003 (北東から)



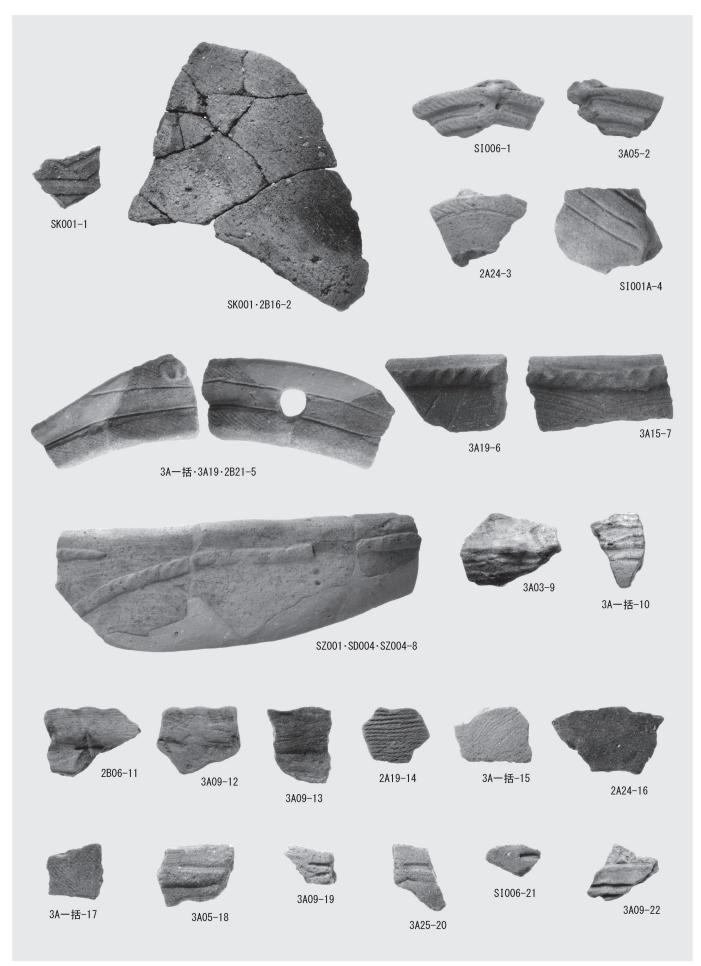
SD004 (北から)



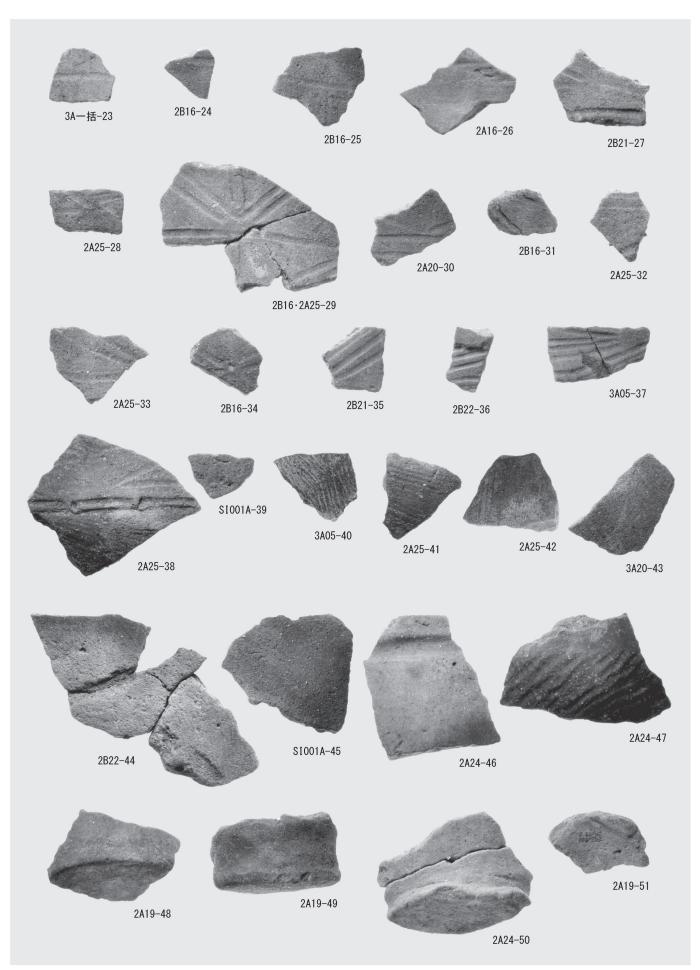
3B03グリッド遺物出土状況(東から)



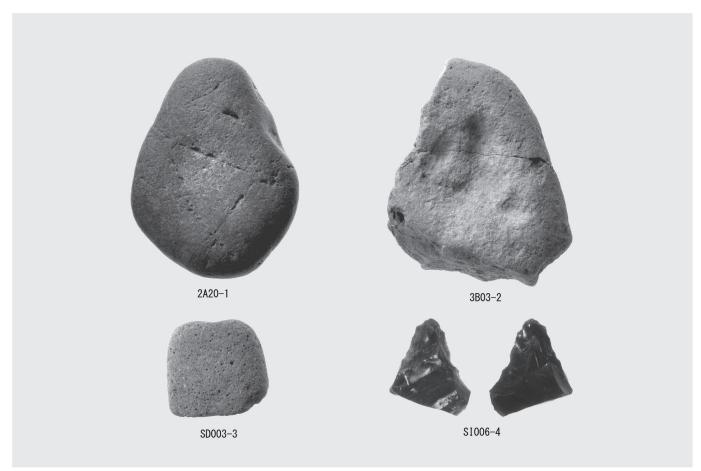
遺構調査風景



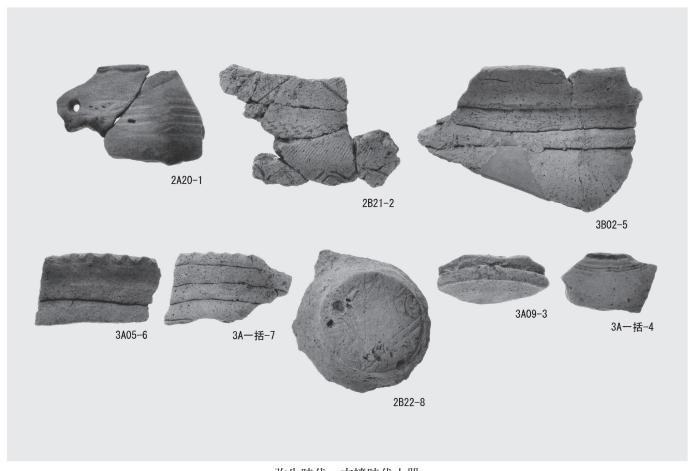
縄文時代土器(1)



縄文時代土器 (2)



縄文時代石器



弥生時代~古墳時代土器



古墳時代~平安時代遺構出土土器(1)

図版 12



古墳時代~平安時代遺構出土土器 (2)



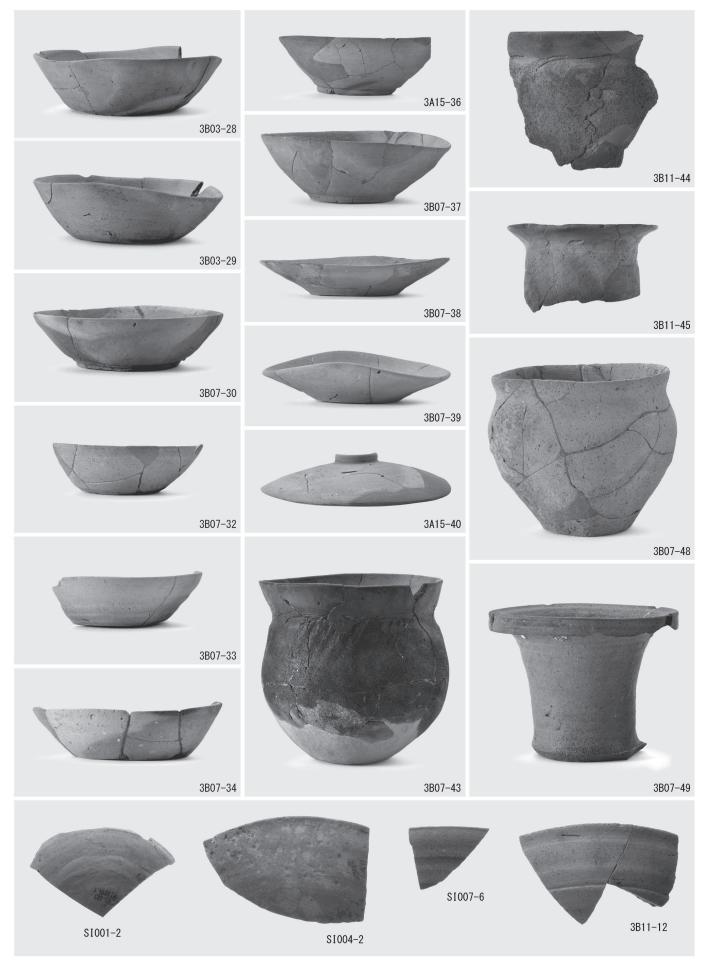
古墳時代~平安時代遺構出土土器 (3)



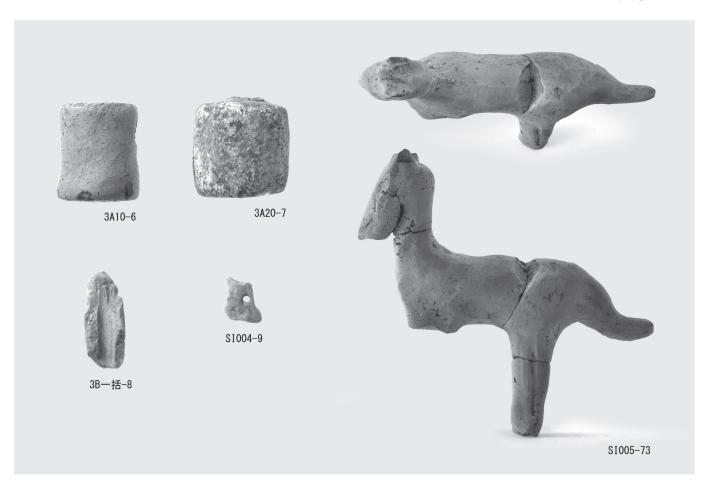
古墳時代~平安時代遺構出土土器(4)

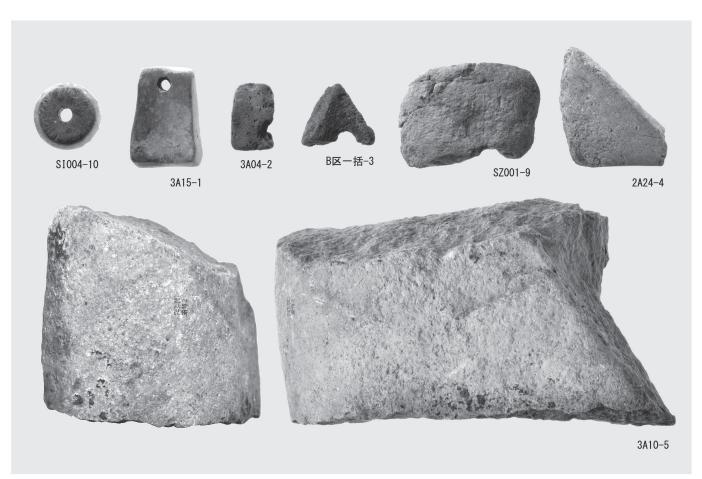


古墳時代~平安時代遺構(5)・グリッド出土土器(1)



古墳時代~平安時代遺構・グリッド出土土器 (2)





古墳時代~平安時代土製品・石製品

報告書抄録

TNUEDOM													
ふ	ŋ	が	な みな	みぼうそ	うしお	かまちいせき							
書		ź	名 南原	南房総市岡町遺跡									
副	書	ź	名 広場	広域営農団地農道整備事業(安房2期地区)埋蔵文化財発掘調査報告書									
卷		ì	欠										
<u>ئ</u> ک) –	ズ :	名 千葉	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告									
シリ	ーズ	番 -	身第2	第 27 集									
編	著	者	名 安井	健一・	伊藤	智樹							
編	集	機	月 千芽	5県教育	ī委員	会							
所	在	-	也 〒 2	60-866	52 1	一葉県千葉市	市中央区	市場	盯 1	-1 TEL	043-22	23-412	29
発 行 年 月 日 西暦 2018 年 3 月 28 日													
ふりァ			りがな		コ	ード	北緯	東絲	Z Ł	調査期間	調査面積等		調査原因
所収遺	游名			1 1	町村	遺跡番号	(日本)	則地系)	10.11.2011		出領寸	
an it is it	u tt tt 貴 跡	南無谷	市富浦町 - 2ほか	2	243	003	35度 3分 41秒	139 49 <i>4</i> 47 ₹	分	20160725 ~ 20161107	1,075㎡ 基		広域営農団地農道 整備事業(安房2 期地区)
所収遺	跡名	1		<u> </u> な時代	;	<u> </u> 主な	な遺構			 主な遺物	特記事項		··· ,
岡町道		包蔵地	縄文	縄文 弥生 古墳		竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑 溝		凹生器石	種又工統、石益 (暦石・ 四石・敲 石・石鏃)、弥 生土器、土師器、須恵 器、土製品 (土錘・エ馬)、海岸 元制号 (牡絲無声・エ馬)		県下では7遺跡目、 地域では初穴住居跡 土馬したまた、まました。 出土した地域で、また、 部ではない。 は、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、 、、		
調査地点は、海岸から約400m、標高12mの丘陵先端部に立地する。縄文時代では、晩期荒海式の資料が得られた。竪穴住居跡の時期は、古墳時代前期〜後期、平安時代前期と考えられる。古墳時代要約 約 では、竪穴住居跡のほか竪穴を持たない居住跡とみられる痕跡が発見されている。平安時代では、土馬に伴って多量の土師器が出土しているが、その多くは供膳形態の土器であり、土馬祭祀との関連がうかがえる。													

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第27集

南房総市岡町遺跡

一 広域営農団地農道整備事業(安房2期地区)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 30 年 3 月 28 日発行